分担研究報告書

全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査

分担研究者　尾崎　茂　東武丸山病院
研究協力者　和田　清　国立精神・神経センター精神保健研究所
福井　進　三芳病院

研究要旨　日本における薬物依存・乱用の実態と動向を把握するために、全国の有床精神科医療施設1,567施設を対象に、1996年9月1日から10月31日までの２ヶ月間に受診した薬物関連精神疾患患者の実態調査を郵送法により施行した。回答は578施設（36.9%）から得られ、有効該当症例は904例であった。覚せい剤症例は509例（56.3%）、有機溶剤症例206例（22.8%）であり、両薬物が依然として日本における主要な乱用薬物であった。覚せい剤症例は、前回調査に比較して増加し、乱用の長期化、症状の遷延・再燃の増加とともに、初期乱用者も増加している可能性が示唆された。状態像による分類では、覚せい剤精神病が294例（57.8%）（このうち105例が遷延・持続型）、残遺症候群が283例（55.6%）と高い割合を示した。有機溶剤症例は全体としては減少の傾向がみられたが、使用期間１年未満の初期乱用者の割合は7.3%と前回調査より増加しており、若年層の有機溶剤離れが進んでいると判断するには慎重を要すると思われた。大麻症例は、主たる使用薬剤としては８例（0.9%）であったが、大麻乱用歴をもつ症例は97例と前回調査時より増加しており、乱用の拡がりがうかがわれた。睡眠薬・抗不安薬・鎮痛薬を主たる乱用薬物とする症例は、各々38例（4.2%）、13例（1.4%）、20例（2.2%）と低率であったが、多剤併用例が多く、依然としてその動向に注意が必要であると考えられた。鎮咳薬症例は21例（2.3%）と減少傾向であったが、長期乱用と短い中断期間から依存形成の強さがうかがわれた。このほか1994年に初めて報告されたLSDが21例と増加し、ヘロイン７例、MDMA３例等のこれまでになかった薬物の報告もみられ、乱用薬剤の多様化がうかがわれた。

A. 研究目的

日本における薬物乱用においては、この20年以上にわたり覚せい剤と有機溶剤がその主要な地位を占めてきたことは福井らの報告に詳しい[1,2]。なかでも覚せい剤は、1975年頃からのいわゆる第二次覚せい剤乱用期を経て、一時はその乱用の勢いが衰えたかにも見えた。しかし最近の新聞報道等によると、乱用がごく一般の市民層や学生にかなりの拡がりを見せており、特に乱用の低年齢化には多大な危惧の念を抱かざるを得ない。さらに近年、海外の影響を受け、あるいは組織的な国内への持ち込みなどによって、覚せい剤のみならずコカインや大麻をはじめとする違法薬物が容易に入手できるようになり、これらの薬物乱用の流行の兆しがうかがえる。また、睡眠薬をはじめとする向精神薬やその他の医療用薬物の乱用・依存問題も依然として医学的、社会的問題である。一方で、有機溶剤乱用に関してはその検挙者数で見る限りやや減少傾向にある印象を受けるが、薬物乱用への門を開くgateway drugとしての重要性が指摘されている[3]。

薬物乱用・依存の対策を考える上で、一般市民、教育現場、矯正施設、医療施設などにおける多面的な疫学的調査が必要である。特に精神科医療施設における実態は、社会での薬物乱用・依存を反映するものであり、その実態調査はきわめて重要である。これまで、全国の有床精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査は、佐藤らにより1976年[4]、1981年[5]、1982年[6]に、また福井らにより1987年[7]、1989年[8]、1991年[9]、1993年[10]および1994年[2]に施行され、精神科医療の現場における薬物関連精神疾患の実態について貴重な情報が提供されてきた。

今年度の全国の精神科医療施設における実態調査は1996年の9、10月の２カ月間にわたり施行された。今回の調査においては、これまで同様の薬物乱用の全般的な実態把握とともに、覚せい剤中毒者対策に関する専門家会議で提唱された診断分類[11]を基に、覚せい剤関連精神疾患の類型化を試みた。また、症状の遷延化、再燃・再発についてその要因を探るため[12]、過去の薬物使用歴、飲酒状況、遺伝歴などについての詳しい質問項目を設けた。これらの見地から精神科医療の現場での薬物乱用・依存の今日的な問題を探り、治療対策を検討する資料としたい。

B．研究方法

１．対象

調査対象施設は、日本全国の有床の精神科医療施設であり、施設の抽出は1994年度版病院要覧によった[13]。内訳は、民間病院精神科1,291施設、自治体病院精神科143施設、大学病院精神科84施設、国立病院精神科49施設の計1,567施設である。

２．方法

１）調査期間および対象症例

調査期間は1996年９月１日から10月31日までの２ヶ月間で、この間に調査対象医療施設を受診した外来患者、あるいは新入院または継続して入院中の薬物関連精神疾患患者である。

２）調査用紙の発送、記載及び回収

調査対象全施設に対して、あらかじめ調査の趣旨と方法を葉書により通知した上で、1996年８月下旬に郵送法により調査用紙を送付した。上記条件１）を満たす全症例について担当医師に調査用紙の記載を求めた。調査用紙の回収は11月30日を期限とした。

３）「主たる使用薬物」の定義

該当症例の主たる使用薬物は、以下のように分類した。

（a）覚せい剤（以下、本報告書では「覚せい剤症例」と呼ぶ）
（b）有機溶剤（同、「有機溶剤症例」）
（c）睡眠薬（「睡眠薬症例」）
（d）抗不安薬（「抗不安薬症例」）
（e）鎮痛薬（「鎮痛薬症例」）
（f）鎮咳薬（「鎮咳薬症例」）
（g）大麻（「大麻症例」）
（h）その他単剤（「その他単剤症例」）
（i）その他多剤（「その他多剤症例」）

以上の分類は次のような定義で行った。すなわち、単独使用の場合は当該単独使用薬物、多剤併用の場合は、（１）記載医師が“主たる使用薬物”として選択した薬物、（２）調査用紙の“質問19）主たる乱用薬物が「覚せい剤」の症例について、調査時点における下記の状態の有無”に記載がある場合は“覚せい剤”、（３）上記(1)(2)に該当しない場合は、過去１年以内に使用した薬物、（４）上記(1)(2)(3)に該当しない場合は「その他多剤症例」に分類した。

C．結果

１．調査用紙回収状況

１）各施設種別の回答状況（表１）

1,567施設に調査用紙を送付し、578施設（36.9%）より回答を得た。このうち、327施設（20.9%）は「該当症例なし」の回答であった。「該当症例あり」の回答は251施設（16.0%）より寄せられ、有効該当症例数は904例であった。

２）主たる使用薬物別症例数（表２）

方法３）で述べた定義によって分類した主たる薬物別の該当症例数と割合を表２に示す。違法薬物である「覚せい剤」と「有機溶剤」使用例で全体の79.1%を占め、両薬物が依然として日本における主要な乱用薬物であることが示されている。1994年度調査での主要薬物の分類と全く同一の基準でない部分もあるため数値の単純な比較はできないが、全該当症例に占める「覚せい剤症例」の割合は上昇、「有機溶剤症例」は減少傾向にあった。その他、「睡眠薬」「鎮痛薬」「鎮咳薬症例」は減少、「抗不安薬」「大麻症例」でもやや減少傾向がみられた。今回は主たる薬物を１剤に特定困難な例を

表２　主たる使用薬物別の症例数と割合

	症例数	割　合
覚せい剤	509	56.3%
有機溶剤	206	22.8%
睡眠薬	38	4.2%
抗不安薬	13	1.4%
鎮痛薬	20	2.2%
鎮咳薬	21	2.3%
大　麻	8	0.9%
その他多剤	85	9.4%
その他単剤	4	0.4%
計	904	100.0%

「その他多剤症例」としたが、85例で全体の9.4%を占めた。

3）「その他多剤症例」（表3）「その他単剤症例」における使用薬物の内訳

「その他多剤症例」の使用薬物の内訳について表3に示す。「その他多剤症例」は85例で該当症例全体の10%近くを占め、薬物乱用における多剤使用の傾向がうかがわれた。この中では、睡眠薬、抗不安薬、鎮痛薬、鎮咳薬使用の既往歴をもつ使用例がそれぞれ60例（70.6%）、42例（49.4%）、42例（49.4%）、28例（32.9%）と多かった。また最近1年以内の使用薬物の内訳でもこれらの薬物使用例が57～81%と多く、このような医療用薬物の乱用が依然として目立っていた。

「その他単剤症例」でみられた使用薬物は、メチルフェニデート2例、ビペリデン1例、クロルメザノン(トランコパール)1例であった。

表1　調査用紙発送施設と回収状況

	依頼総数	回答あり		症例あり		該当症例数
		施設数	%	施設数	%	
民間病院精神科	1291	457	(35.4)	182	(14.1)	531
自治体立病院精神科	143	58	(40.6)	30	(21.0)	153
大学病院精神科	84	38	(45.2)	22	(26.2)	53
国立病院精神科	49	25	(51.0)	17	(34.7)	167
総　　数	1567	578	(36.9)	251	(16.0)	904

表3「その他多剤症例」（総症例数85例）における使用薬物の内訳

使用薬剤	あり（総症例数）	あり（%）	1年以内の使用 あり	1年以内の使用 あり（%）	1年以内の使用 なし	1年以内の使用 なし（%）	1年以内の使用 不明	なし 例数	なし（%）	不明 例数	不明（%）
覚せい剤	11	(12.9)	4	(36.4)	7	(63.6)	0	71	(83.5)	3	(3.5)
有機溶剤	14	(16.5)	2	(14.3)	10	(71.4)	2	68	(80.0)	3	(3.5)
睡眠薬	60	(70.6)	46	(76.7)	11	(18.3)	3	15	(17.6)	10	(11.8)
抗不安薬	42	(49.4)	34	(81.0)	4	(9.5)	4	29	(34.1)	14	(16.5)
鎮痛薬	42	(49.4)	27	(64.3)	14	(33.3)	1	32	(37.6)	11	(12.9)
鎮咳薬	28	(32.9)	16	(57.1)	11	(39.3)	1	39	(45.9)	18	(21.2)
大　麻	21	(24.7)	3	(14.3)	18	(85.7)	0	46	(54.1)	18	(21.2)
ｺｶｲﾝ	6	(7.1)	1	(16.7)	5	(83.3)	0	57	(67.1)	22	(25.9)
その他	24	(28.2)	12	(50.0)	9	(37.5)	3	35	(41.2)	26	(30.6)

表4　都道府県別回答状況と該当症例数

都道府県名	総施設数	回答あり 施設数	回答あり 回答率	該当症例なし 施設数	該当症例なし 回答率	該当症例あり 施設数	該当症例あり 回答率	該当症例 例数	該当症例 全例中割合
1 北海道	119	40	(33.6%)	27	(22.7%)	13	(10.9%)	40	(4.4%)
2 青森	23	11	(47.8%)	4	(17.4%)	7	(30.4%)	13	(1.4%)
3 岩手	21	6	(28.6%)	5	(23.8%)	1	(4.8%)	1	(0.1%)
4 宮城	23	10	(43.5%)	5	(21.7%)	5	(21.7%)	20	(2.2%)
5 秋田	23	13	(56.5%)	9	(39.1%)	4	(17.4%)	5	(0.6%)
6 山形	14	3	(21.4%)	3	(21.4%)	0		0	
7 福島	37	15	(40.5%)	7	(18.9%)	8	(21.6%)	14	(1.5%)
8 茨城	39	13	(33.3%)	7	(17.9%)	6	(15.4%)	12	(1.3%)
9 栃木	29	11	(37.9%)	8	(27.6%)	3	(10.3%)	6	(0.7%)
10 群馬	20	5	(25.0%)	3	(15.0%)	2	(10.0%)	4	(0.4%)
11 埼玉	48	17	(35.4%)	10	(20.8%)	7	(14.6%)	14	(1.5%)
12 千葉	48	24	(50.0%)	9	(18.8%)	15	(31.3%)	91	(10.1%)
13 東京	111	36	(32.4%)	11	(9.9%)	25	(22.5%)	180	(19.9%)
14 神奈川	58	20	(34.5%)	10	(17.2%)	10	(17.2%)	42	(4.6%)
15 新潟	29	20	(69.0%)	13	(44.8%)	7	(24.1%)	10	(1.1%)
16 富山	29	7	(24.1%)	6	(20.7%)	1	(3.4%)	2	(0.2%)
17 石川	20	6	(30.0%)	3	(15.0%)	3	(15.0%)	5	(0.6%)
18 福井	11	3	(27.3%)	3	(27.3%)	0		0	
19 山梨	11	3	(27.3%)	0		3	(27.3%)	14	(1.5%)
20 長野	31	12	(38.7%)	8	(25.8%)	4	(12.9%)	6	(0.7%)
21 岐阜	19	10	(52.6%)	5	(26.3%)	5	(26.3%)	9	(1.0%)
22 静岡	32	12	(37.5%)	5	(15.6%)	7	(21.9%)	27	(3.0%)
23 愛知	56	15	(26.8%)	7	(12.5%)	8	(14.3%)	20	(2.2%)
24 三重	21	6	(28.6%)	5	(23.8%)	1	(4.8%)	1	(0.1%)
25 滋賀	12	5	(41.7%)	3	(25.0%)	2	(16.7%)	8	(0.9%)
26 京都	25	8	(32.0%)	6	(24.0%)	2	(8.0%)	11	(1.2%)
27 大阪	66	22	(33.3%)	6	(9.1%)	16	(24.2%)	74	(8.2%)
28 兵庫	38	19	(50.0%)	10	(26.3%)	9	(23.7%)	29	(3.2%)
29 奈良	11	5	(45.5%)	2	(18.2%)	3	(27.3%)	16	(1.8%)
30 和歌山	13	2	(15.4%)	2	(15.4%)	0		0	
31 鳥取	11	6	(54.5%)	2	(18.2%)	4	(36.4%)	5	(0.6%)
32 島根	15	9	(60.0%)	6	(40.0%)	3	(20.0%)	3	(0.3%)
33 岡山	24	9	(37.5%)	2	(8.3%)	7	(29.2%)	39	(4.3%)
34 広島	39	18	(46.2%)	15	(38.5%)	3	(7.7%)	4	(0.4%)
35 山口	31	12	(38.7%)	11	(35.5%)	1	(3.2%)	1	(0.1%)
36 徳島	22	5	(22.7%)	1	(4.5%)	4	(18.2%)	12	(1.3%)
37 香川	20	6	(30.0%)	3	(15.0%)	3	(15.0%)	4	(0.4%)
38 愛媛	21	5	(23.8%)	2	(9.5%)	3	(14.3%)	5	(0.6%)
39 高知	25	12	(48.0%)	7	(28.0%)	5	(20.0%)	21	(2.3%)
40 福岡	102	34	(33.3%)	19	(18.6%)	15	(14.7%)	58	(6.4%)
41 佐賀	19	6	(31.6%)	3	(15.8%)	3	(15.8%)	9	(1.0%)
42 大分	25	6	(24.0%)	5	(20.0%)	1	(4.0%)	5	(0.6%)
43 熊本	44	20	(45.5%)	12	(27.3%)	8	(18.2%)	33	(3.7%)
44 長崎	38	17	(44.7%)	14	(36.8%)	3	(7.9%)	4	(0.4%)
45 宮崎	28	11	(39.3%)	6	(21.4%)	5	(17.9%)	17	(1.9%)
46 鹿児島	47	15	(31.9%)	12	(25.5%)	3	(6.4%)	7	(0.8%)
47 沖縄	19	2	(10.5%)	2	(10.5%)	0		0	
(不明)		6		3		3		3	
(合計)	1567	578	(36.9%)	327	(20.9%)	251	(16.0%)	904	

4）都道府県別回答状況と該当症例（表４）
都道府県別にみた回答率では、沖縄県の10.5%から新潟県の69.0%までみられた。該当症例数では、東京都、千葉県、大阪府、福岡県、神奈川県、北海道、岡山県などが多かった。

5）主たる使用薬物の性・年齢の分布（表５）
性別では、抗不安薬を除くすべての薬物で男性が女性を上回った。年齢分布では、全体的に20～30歳代が多いが、覚せい剤では40歳以上の症例が175例（34.4%）で「覚せい剤症例」全体の約1/3を占めた。平均年齢で見ると、「大麻症例」および「有機溶剤症例」が約28歳と最も低年齢層に属しており、「鎮痛薬症例」「睡眠薬症例」は40歳以上と高い平均年齢を示し「抗不安薬症例」も39歳でこれに次いで高かった。「覚せい剤症例」は平均36.1歳とその中間に属していた。

6）都道府県別にみた主たる使用薬物（表６）
主たる使用薬物別症例を都道府県別にみると、全体としては東京、千葉、大阪、福岡、神奈川といった大都市圏に位置する医療機関からの回答症例が多い傾向があった。この結果から報告のない都道府県には当該薬物乱用が少ないとただちに結論付けることはもちろん不可能である。「覚せい剤症例」「有機溶剤症例」は他の薬剤使用例に比較してほぼ全国からの報告がみられ、両薬物の乱用の拡がりがうかがわれる。

7）最終学歴（表７）
主たる使用薬物別にみた最終学歴について表７に示す。「覚せい剤症例」「有機溶剤症例」「睡眠薬症例」「鎮痛薬症例」「その他多剤」では、中学卒または高校中退・卒の割合が高い。「抗不安薬症例」「鎮咳薬症例」「大麻症例」では高校中退または卒業の割合が高い。また、「大麻症例」では大学中退または卒業の割合も高く、薬物乱用者全体からみると高学歴であるという特徴がある。

8）職業（表８）
薬物乱用前の職業に関してみると、まず「覚せい剤症例」では土木建築業、工員、飲食業等が多いが、無職の割合も12.6%と高い。「有機溶剤症例」では、薬物乱用が低年齢で開始されることを反映し、乱用前の中・高校生の割合が高く、次いで土木建築業、無職が高い割合を示した。「睡眠薬症例」では交通運輸業、土木建築業が比較的多く、次いで、店員、工員や中・高校生や主婦、医療薬業関係者が多かった。「抗不安薬症例」では風俗営業関係のほか公務員や医療薬業関係も同様にみられた。「鎮痛薬症例」「鎮咳薬症例」では会社員、店員のほか高校生も比較的多かった。「抗不安薬症例」「鎮痛薬症例」「鎮痛薬症例」「大麻症例」では会社員、工員、店員が多く、「大麻症例」では大学生の割合が高かった。
現在の職業をみると無職の割合が「覚せい剤症例」で53.2%と乱用前の４倍強、「有機溶剤症例」で55.3%と５倍に増加しているのが目立った。全体をみても、無職の割合が薬物乱用後に増加しており、薬物使用が職業を中心とする社会生活に深刻な影響を及ぼしていることがうかがえた。また、医療薬業関係者の割合が特に「睡眠薬症例」「抗不安薬症例」「その他多剤症例」で比較的高いという特徴がみられた。

9）暴力団との関係（表９）
過去、現在を含めて暴力団と何らかの関係をもっていたのは全体の30.7%を占め、47.7%は関係がないという結果だった。過去に暴力団と関係があった症例の割合は「覚せい剤症例」「抗不安薬症例」、次いで「睡眠薬症例」で高く、現在も関係がある症例の割合はほとんどすべての薬物において低下し、10%以下であった。「覚せい剤症例」「その他単剤症例」を除き、約60～95%の症例は過去・現在において暴力団と関係がなかった。今回の調査では薬物の入手経路についての質問は設けなかったが、医療用薬物は医療機関からの入手の割合が高いと思われる。今回の結果は、違法薬物についても暴力団を介さない入手経路が一般的になり、入手がより多様化し、容易になってきていることを反映するものかもしれない。

１０）配偶関係（表10）
配偶関係では、「覚せい剤症例」では約半数が未婚であり、離婚率も24.4%と高い。「有機溶剤症例」「鎮咳薬症例」「大麻症例」では約3/4が未婚であり、これらの症例のほとんどが20～30歳台で、未成年者がわずかしかいないことを考慮すると高い未婚率であると思われる。

表5　主たる使用薬物別にみた性別・年齢の分布

総症例数	覚せい剤 (509例)	有機溶剤 (206例)	睡眠薬 (38例)	抗不安薬 (13例)	鎮痛薬 (20例)	鎮咳薬 (21例)	大麻 (8例)	その他多剤 (85例)	その他単剤 (4例)
性別									
男性	398 (78.2%)	185 (89.8%)	27 (71.1%)	6 (46.2%)	15 (75.0%)	16 (76.2%)	6 (75.0%)	53 (62.4%)	3 (75.0%)
女性	109 (21.4%)	19 (9.2%)	11 (28.9%)	7 (53.8%)	5 (25.0%)	5 (23.8%)	2 (25.0%)	31 (36.5%)	1 (25.0%)
不明	2 (0.4%)	2 (1.0%)						1 (1.2%)	
年齢構成									
<14	0	3 (1.5%)	0	0	0	0	0	0	0
15～19	10 (2.0%)	23 (11.2%)	0	0	0	0	0	1 (1.2%)	0
20～24	57 (11.2%)	49 (23.8%)	1 (2.6%)	0	0	3 (14.3%)	1 (12.5%)	7 (8.2%)	0
25～29	102 (20.0%)	47 (22.8%)	7 (18.4%)	2 (15.4%)	1 (5.0%)	4 (19.0%)	5 (62.5%)	15 (17.6%)	1 (25.0%)
30～34	89 (17.5%)	30 (14.6%)	3 (7.9%)	2 (15.4%)	3 (15.0%)	5 (23.8%)	2 (25.0%)	13 (15.3%)	2 (50.0%)
35～39	73 (14.3%)	31 (15.0%)	5 (13.2%)	2 (15.4%)	5 (25.0%)	7 (33.3%)	0	11 (12.9%)	0
40～44	54 (10.6%)	15 (7.3%)	7 (18.4%)	3 (23.1%)	4 (20.0%)	1 (4.8%)	0	12 (14.1%)	1 (25.0%)
45～49	56 (11.0%)	6 (2.9%)	2 (5.3%)	1 (7.7%)	2 (10.0%)	1 (4.8%)	0	10 (11.8%)	0
50～54	33 (6.5%)	2 (1.0%)	7 (18.4%)	1 (7.7%)	1 (5.0%)	0	0	5 (5.9%)	0
55～59	15 (2.9%)	0	3 (7.9%)	1 (7.7%)	0	0	0	6 (7.1%)	0
60～64	13 (2.6%)	0	1 (2.6%)	0	1 (5.0%)	0	0	1 (1.2%)	0
65～69	4 (0.8%)	0	2 (5.3%)	0	0	0	0	3 (3.5%)	0
70～74	0	0	0	0 (0.0%)	1 (5.0%)	0	0	1 (1.2%)	0
75<	0	0	0	1 (7.7%)	0	0	0	0	0
不明	3 (0.6%)	0	0	0	2 (10.0%)	0	0	0	0
平均±SD(歳)	36.1±10.9	28.5±8.3	42.5±11.6	39.0±9.3	44.8±14.5	32.0±6.6	28.0±2.9	38.9±12.4	33.0±7.5

表6　都道府県別にみた主たる薬物別症例数と各薬物使用総症例中の比率

主要薬物	覚せい剤	有機溶剤	睡眠薬	抗不安薬	鎮痛薬	鎮咳薬	大麻	その他多剤	その他単剤
(症例数)	(509例)	(206例)	(38例)	(13例)	(20例)	(21例)	(8例)	(85例)	(4例)
1 北海道	17 (3.3%)	7 (3.4%)	2 (5.3%)	0	2 (10.0%)	1 (4.8%)	2 (25.0%)	8 (9.4%)	1 (25.0%)
2 青森	4 (0.8%)	6 (2.9%)	0	0	2 (10.0%)	0	0	1 (1.2%)	0
3 岩手	0	1 (0.5%)	0	0	0	0	0	0	0
4 宮城	7 (1.4%)	6 (2.9%)	0	1 (7.7%)	1 (5.0%)	2 (9.5%)	0	3 (3.5%)	0
5 秋田	2 (0.4%)	2 (1.0%)	0	0	0	0	0	1 (1.2%)	0
6 山形	0	0	0	0	0	0	0	0	0
7 福島	9 (1.8%)	4 (1.9%)	0	0	1 (5.0%)	0	0	0	0
8 茨城	8 (1.6%)	2 (1.0%)	0	2 (15.4%)	0	0	0	0	0
9 栃木	3 (0.6%)	2 (1.0%)	1 (2.6%)	0	0	0	0	0	0
10 群馬	2 (0.4%)	0	0	0	0	1 (4.8%)	0	1 (1.2%)	0
11 埼玉	12 (2.4%)	1 (0.5%)	0	0	0	1 (4.8%)	0	0	0
12 千葉	60 (11.8%)	21 (10.2%)	5 (13.2%)	1 (7.7%)	0	0	0	4 (4.7%)	0
13 東京	117 (23.0%)	28 (13.6%)	8 (21.1%)	1 (7.7%)	2 (10.0%)	4 (19.0%)	1 (12.5%)	18 (21.2%)	1 (25.0%)
14 神奈川	31 (6.1%)	9 (4.4%)	0	0	0	0	0	2 (2.4%)	0
15 新潟	5 (1.0%)	1 (0.5%)	0	1 (7.7%)	0	0	0	3 (3.5%)	0
16 富山	1 (0.2%)	1 (0.5%)	0	0	0	0	0	0	0
17 石川	0	1 (0.5%)	0	0	1 (5.0%)	0	0	3 (3.5%)	0
18 福井	0	0	0	0	0	0	0	0	0
19 山梨	4 (0.8%)	7 (3.4%)	1 (2.6%)	0	0	1 (4.8%)	0	1 (1.2%)	0
20 長野	2 (0.4%)	0	1 (2.6%)	0	1 (5.0%)	0	0	2 (2.4%)	0
21 岐阜	5 (1.0%)	1 (0.5%)	0	0	1 (5.0%)	1 (4.8%)	0	1 (1.2%)	0
22 静岡	14 (2.8%)	6 (2.9%)	0	0	1 (5.0%)	0	2 (25.0%)	4 (4.7%)	0
23 愛知	11 (2.2%)	6 (2.9%)	1 (2.6%)	0	0	0	1 (12.5%)	1 (1.2%)	0
24 三重	0	1 (0.5%)	0	0	0	0	0	0	0
25 滋賀	4 (0.8%)	1 (0.5%)	1 (2.6%)	0	0	0	0	2 (2.4%)	0
26 京都	6 (1.2%)	1 (0.5%)	1 (2.6%)	1 (7.7%)	0	0	0	2 (2.4%)	0
27 大阪	46 (9.0%)	17 (8.3%)	4 (10.5%)	0	1 (5.0%)	4 (19.0%)	0	1 (1.2%)	1 (25.0%)
28 兵庫	14 (2.8%)	9 (4.4%)	0	0	1 (5.0%)	2 (9.5%)	1 (12.5%)	2 (2.4%)	0
29 奈良	7 (1.4%)	4 (1.9%)	0	1 (7.7%)	0	0	1 (12.5%)	3 (3.5%)	0
30 和歌山	0	0	0	0	0	0	0	0	0
31 鳥取	3 (0.6%)	1 (0.5%)	0	0	0	0	0	1 (1.2%)	0
32 島根	1 (0.2%)	2 (1.0%)	0	0	0	0	0	0	0
33 岡山	20 (3.9%)	7 (3.4%)	2 (5.3%)	0	2 (10.0%)	1 (4.8%)	0	7 (8.2%)	0
34 広島	3 (0.6%)	1 (0.5%)	0	0	0	0	0	0	0
35 山口	0	0	0	1 (7.7%)	0	0	0	0	0
36 徳島	4 (0.8%)	0	4 (10.5%)	1 (7.7%)	0	0	0	3 (3.5%)	0
37 香川	1 (0.2%)	0	1 (2.6%)	0	1 (5.0%)	0	0	1 (1.2%)	0
38 愛媛	3 (0.6%)	1 (0.5%)	0	0	0	0	0	1 (1.2%)	0
39 高知	12 (2.4%)	7 (3.4%)	1 (2.6%)	0	0	0	0	1 (1.2%)	0
40 福岡	38 (7.5%)	16 (7.8%)	1 (2.6%)	2 (15.4%)	0	1 (4.8%)	0	0	0
41 佐賀	4 (0.8%)	2 (1.0%)	0	0	1 (5.0%)	0	0	2 (2.4%)	0
42 大分	3 (0.6%)	0	1 (2.6%)	0	0	0	0	1 (1.2%)	0
43 熊本	18 (3.5%)	12 (5.8%)	0	0	1 (5.0%)	2 (9.5%)	0	0	0
44 長崎	0	2 (1.0%)	0	0	1 (5.0%)	0	0	0	1 (25.0%)
45 宮崎	6 (1.2%)	7 (3.4%)	3 (7.9%)	0	0	0	0	1 (1.2%)	0
46 鹿児島	1 (0.2%)	3 (1.5%)	0	1 (7.7%)	0	0	0	2 (2.4%)	0
47 沖縄	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(不明)	1 (0.2%)	0	0	0	0	0	0	2 (2.4%)	0

表7　薬物使用者の最終学歴

		主たる使用薬物																			
		覚せい剤		有機溶剤		睡眠薬		抗不安薬		鎮痛薬		鎮咳薬		大麻		その他多剤		その他単剤	
		例数	%	例数	%	例数	%	例数	%	例数	%	例数	%	例数	%	例数	%	例数	%
小学校	在学中	0		0		0		0		0		0		0		0		0	
	中退	3	(0.6)	0		0		0		0		0		0		0		0	
	卒業	3	(0.6)	0		0		0		0		0		0		1	(1.2)	0	
	不明	0		0		0		0		0		0		0		0		0	
中学校	在学中	0		6	(2.9)	0		0		0		0		0		0		0	
	中退	6	(1.2)	2	(1.0)	0		0		0		0		0		1	(1.2)	0	
	卒業	194	(38.1)	76	(36.9)	11	(28.9)	0		5	(25.0)	2	(9.5)	0		14	(16.5)	0	
	不明	8	(1.6)	1	(0.5)	0		1	(7.7)	0		0		0		0		0	
高校	在学中	1	(0.2)	4	(1.9)	0		0		0		0		0		0		0	
	中退	124	(24.4)	60	(29.1)	5	(13.2)	2	(15.4)	2	(10.0)	8	(38.1)	1	(12.5)	17	(20.0)	0	
	卒業	77	(15.1)	43	(20.9)	11	(28.9)	5	(38.5)	8	(40.0)	4	(19.0)	3	(37.5)	17	(20.0)	2	(50.0)
	不明	4	(0.8)	0		1	(2.6)	0		0		0		0		0		0	
専門学校	在学中	0		0		0		0		0		1	(4.8)	0		0		0	
	中退	14	(2.8)	7	(3.4)	0		0		0		1	(4.8)	0		1	(1.2)	0	
	卒業	16	(3.1)	3	(1.5)	1	(2.6)	2	(15.4)	0		2	(9.5)	0		5	(5.9)	0	
	不明	0		0		1	(2.6)	0		0		0		0		0		0	
短大	在学中	0		0		0	(0.0)	0		0		0		0		0		0	
	中退	0		1	(0.5)	1	(2.6)	0		0		0		0		1	(1.2)	0	
	卒業	2	(0.4)	0		0		0		0		0		0		4	(4.7)	0	
	不明	0		0		0		0		0		0		0		0		0	
大学	在学中	0		0		0		0		0		0		0		2	(2.4)	0	
	中退	7	(1.4)	0		1	(2.6)	1	(7.7)	1	(5.0)	0		3	(37.5)	5	(5.9)	0	
	卒業	6	(1.2)	1	(0.5)	1	(2.6)	2	(15.4)	3	(15.0)	2	(9.5)	1	(12.5)	10	(11.8)	1	(25.0)
	不明	1	(0.2)	0		1	(2.6)	0		0		0		0		1	(1.2)	0	
	不明	43	(8.4)	2	(1.0)	4	(10.5)	0		1	(5.0)	1	(4.8)	0		6	(7.1)	1	(25.0)
計		509		206		38		13		20		21		8		85		4	

表8　薬物使用前および現在の職業

薬物使用前/現在	覚せい剤（509例）				有機溶剤（206例）				睡眠薬（38例）				抗不安薬（13例）				鎮痛薬（20例）				鎮咳薬（21例）				大麻（8例）				その他多剤（85例）				その他単剤（4例）			
	主たる使用薬物																				主たる使用薬物															
	前	%	現在	%	前	%	現在	%	前	%	現在	%	前	%	現在	%	前	%	現在	%	前	%	現在	%	前	%	現在	%	前	%	現在	%	前	%	現在	%
1 農林漁業	9	(1.8)	3	(0.6)	3	(1.5)	3	(1.5)	0		0		0		0		1	(5.0)	1	(5.0)	0		0		0		0		0		0		0		0	
2 商人	4	(0.8)	1	(0.2)	1	(0.5)	0		1	(2.6)	1	(2.6)	0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0	
3 不動産業	1	(0.2)	0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		1	(1.2)	0		0		0	
4 金融業	3	(0.6)	3	(0.6)	0		0		0		0		0		1	(7.7)	0		0		0		0		0		0		0		0		0		0	
5 自営の職人	2	(0.4)	5	(1.0)	1	(0.5)	2	(1.0)	0		1	(2.6)	0		0		0		1	(5.0)	1	(4.8)	1	(4.8)	1	(12.5)	0		2	(7.1)	0		1	(25.0)	1	(25.0)
6 露店・行商	5	(1.0)	2	(0.4)	0		1	(0.5)	1	(2.6)	0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0	
7 その他の自営業	7	(1.4)	4	(0.8)	1	(0.5)	2	(1.0)	1	(2.6)	2	(5.3)	0		0		0		0		0		0		0		0		6	(7.1)	3	(3.5)	0		0	
8 団体役員	0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0	
9 会社員	20	(3.9)	8	(1.6)	6	(2.9)	3	(1.5)	1	(2.6)	0		1	(7.7)	1	(7.7)	4	(20.0)	1	(5.0)	1	(4.8)	1	(4.8)	2	(25.0)	0		5	(5.9)	3	(3.5)	0		0	
10 店員	19	(3.7)	10	(2.0)	3	(1.5)	1	(0.5)	3	(7.9)	1	(2.6)	0		0		0		0		3	(14.3)	2	(9.5)	0		0		5	(5.9)	1	(1.2)	1	(25.0)	0	
11 工員	36	(7.1)	18	(3.5)	9	(4.4)	5	(2.4)	3	(7.9)	2	(5.3)	0		0		0		0		1	(4.8)	0		0		0		4	(4.7)	2	(2.4)	0		0	
12 公務員	1	(0.2)	1	(0.2)	1	(0.5)	0		0		0		2	(15.4)	1	(7.7)	1	(5.0)	1	(5.0)	1	(4.8)	1	(4.8)	0		0		1	(1.2)	1	(1.2)	0		0	
13 風俗営業関係者	25	(4.9)	9	(1.8)	3	(1.5)	1	(0.5)	1	(2.6)	0		2	(15.4)	0		0		0		0		0		0		0		3	(3.5)	0		0		0	
14 風俗営業以外の飲食業関係者	33	(6.5)	12	(2.4)	7	(3.4)	4	(1.9)	2	(5.3)	0		0		0		1	(5.0)	0		3	(14.3)	0		0		0		4	(4.7)	2	(2.4)	0		0	
15 興業関係者	3	(0.6)	0		0		1	(0.5)	0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0	
16 旅館業関係者	0		1	(0.2)	0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0	
17 交通運輸業関係者	22	(4.3)	13	(2.6)	7	(3.4)	4	(1.9)	5	(13.2)	3	(7.9)	0		0		1	(5.0)	0		0		0		0		1	(12.5)	1	(1.2)	0		0		0	
18 土木建築業関係者	78	(15.3)	42	(8.3)	22	(10.7)	22	(10.7)	5	(13.2)	3	(7.9)	0		0		2	(10.0)	1	(5.0)	2	(9.5)	1	(4.8)	0		0		2	(2.4)	2	(2.4)	0		0	
19 日雇い労働者	6	(1.2)	6	(1.2)	10	(4.9)	6	(2.9)	1	(2.6)	0		0		0		0		0		0		0		0		0		1	(1.2)	2	(2.4)	0		0	
20 その他の被雇用者	7	(1.4)	3	(0.6)	6	(2.9)	4	(1.9)	0		0		0		0		2	(10.0)	0		0		2	(9.5)	1	(12.5)	1	(12.5)	1	(1.2)	1	(1.2)	0		0	
21 医療業関係者	7	(1.4)	1	(0.2)	1	(0.5)	1	(0.5)	3	(7.9)	3	(7.9)	2	(15.4)	2	(15.4)	0		0		0		0		0		0		9	(10.6)	4	(4.7)	0		0	
22 芸能関係者	0		1	(0.2)	0		0		0		1	(2.6)	1	(7.7)	0		0		0		0		0		0		0		1	(1.2)	0		0		0	
23 船員	2	(0.4)	0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0	
24 軍人・軍属	2	(0.4)	0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0	
25 小学生	2	(0.4)	0		1	(0.5)	0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0	
26 中学生	32	(6.3)	0		51	(24.8)	6	(2.9)	3	(7.9)	0		1	(7.7)	0		1	(5.0)	0		0		0		0		0		2	(2.4)	0		0		0	
27 高校生	17	(3.3)	1	(0.2)	37	(18.0)	3	(1.5)	2	(5.3)	0		0		0		3	(15.0)	0		2	(9.5)	0		0		0		5	(5.9)	0		0		0	
28 大学生	4	(0.8)	0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		3	(37.5)	0		4	(4.7)	1	(1.2)	0		0	
29 各種学校生	4	(0.8)	0		1	(0.5)	2	(1.0)	1	(2.6)	0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0	
30 主婦	9	(1.8)	16	(3.1)	0		3	(1.5)	3	(7.9)	6	(15.8)	1	(7.7)	3	(23.1)	2	(10.0)	4	(20.0)	0		2	(9.5)	0		1	(12.5)	6	(7.1)	8	(9.4)	0		1	(25.0)
31 家事手伝い	0		9	(1.8)	1	(0.5)	3	(1.5)	0		0		0		0		0		0		0		0		0		1	(12.5)	1	(1.2)	4	(4.7)	0		0	
32 無職	64	(12.6)	271	(53.2)	22	(10.7)	114	(55.3)	0		12	(31.6)	1	(7.7)	5	(38.5)	1	(5.0)	11	(55.0)	4	(19.0)	9	(42.9)	1	(12.5)	3	(37.5)	12	(14.1)	40	(47.1)	0		1	(25.0)
33 不定	25	(4.9)	6	(1.2)	6	(2.9)	4	(1.9)	1	(2.6)	0		0		0		0		0		2	(9.5)	0		0		0		5	(5.9)	1	(1.2)	1	(25.0)	0	
34 不明	42	(8.3)	25	(4.9)	3	(1.5)	4	(1.9)	0		1	(2.6)	1	(7.7)	0		1	(5.0)	0		0		1	(4.8)	0		0		2	(2.4)	2	(2.4)	1	(25.0)	1	(25.0)
35 その他	3	(0.6)	12	(2.4)	0		3	(1.5)	0		0		1	(7.7)	0		0		0		0		0		0		0		1	(1.2)	3	(3.5)	0		0	
記載なし	15	(2.9)	26	(5.1)	3	(1.5)	4	(1.9)	1	(2.6)	2	(5.3)	0		0		0		0		1	(4.8)	1	(4.8)	0		1	(12.5)	1	(1.2)	5	(5.9)	0		0	

表9　主要薬剤別にみた暴力団との関係

		暴力団との関係							
		過去にあったが現在はなし		現在もあり		なし		不明	
	全症例数	例数	(%)	例数	(%)	例数	(%)	例数	(%)
覚せい剤	509	189	(37.1)	45	(8.8)	140	(27.5)	135	(26.5)
有機溶剤	206	17	(8.3)	6	(2.9)	149	(72.3)	34	(16.5)
睡眠薬	38	5	(13.2)	0	(0.0)	27	(71.1)	6	(15.8)
抗不安薬	13	4	(30.8)	1	(7.7)	8	(61.5)	0	(0.0)
鎮痛薬	20	0	(0.0)	1	(5.0)	18	(90.0)	1	(5.0)
鎮咳薬	21	0	(0.0)	0	(0.0)	20	(95.2)	1	(4.8)
大　麻	8	0	(0.0)	0	(0.0)	6	(75.0)	2	(25.0)
その他多剤	85	7	(8.2)	2	(2.4)	62	(72.9)	14	(16.5)
その他単剤	4	0	(0.0)	0	(0.0)	1	(25.0)	3	(75.0)
計	904	222	(24.6)	55	(6.1)	431	(47.7)	196	(21.7)

表10　主たる使用薬物別の配偶関係

		未婚		同棲		既婚		離婚		死別		不明	
	全症例数	例数	%	例数	%	例数	%	例数	%	例数	%	例数	%
覚せい剤	509	258	(50.7)	31	(6.1)	66	(13.0)	124	(24.4)	4	(0.8)	26	(5.1)
有機溶剤	206	164	(79.6)	4	(1.9)	13	(6.3)	21	(10.2)	0	(0.0)	4	(1.9)
睡眠薬	38	12	(31.6)	0	(0.0)	19	(50.0)	5	(13.2)	1	(2.6)	1	(2.6)
抗不安薬	13	3	(23.1)	0	(0.0)	6	(46.2)	4	(30.8)	0	(0.0)	0	(0.0)
鎮痛薬	20	6	(30.0)	1	(5.0)	10	(50.0)	3	(15.0)	0	(0.0)	0	(0.0)
鎮咳薬	21	15	(71.4)	1	(4.8)	3	(14.3)	2	(9.5)	0	(0.0)	0	(0.0)
大　麻	8	6	(75.0)	0	(0.0)	1	(12.5)	0	(0.0)	0	(0.0)	1	(12.5)
その他多剤	85	39	(45.9)	1	(1.2)	27	(31.8)	14	(16.5)	1	(1.2)	3	(3.5)
その他単剤	4	1	(25.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	3	(75.0)
計	904	504	(55.8)	38	(4.2)	145	(16.0)	173	(19.1)	6	(0.7)	38	(4.2)

表11　主たる使用薬物別にみた過去の併用薬物（複数回答）

	過去の使用薬物									
	なし	覚せい剤	有機溶剤	睡眠薬	抗不安薬	鎮痛薬	鎮咳薬	大麻	コカイン	その他
覚せい剤 (509例)	239 (47.0%)	—	216 (42.4%)	67 (13.2%)	31 (6.1%)	18 (3.5%)	9 (1.8%)	64 (12.6%)	21 (4.1%)	23 (4.5%)
有機溶剤 (206例)	170 (82.5%)	8 (3.9%)	—	5 (2.4%)	3 (1.5%)	5 (2.4%)	5 (2.4%)	8 (3.9%)	3 (1.5%)	9 (4.4%)
睡眠薬 (38例)	24 (63.2%)	10 (26.3%)	9 (23.7%)	—	2 (5.3%)	1 (2.6%)	1 (2.6%)	1 (2.6%)	1 (2.6%)	1 (2.6%)
抗不安薬 (13例)	9 (69.2%)	4 (30.8%)	2 (15.4%)	1 (7.7%)	—	0	0	1 (7.7%)	0	0
鎮痛薬 (20例)	16 (80.0%)	1 (5.0%)	4 (20.0%)	2 (10.0%)	1 (5.0%)	—	0	0	0	0
鎮咳薬 (21例)	15 (71.4%)	1 (4.8%)	5 (23.8%)	0	0	3 (14.3%)	—	2 (9.5%)	0	0
大麻 (8例)	3 (37.5%)	4 (50.0%)	2 (25.0%)	1 (12.5%)	1 (12.5%)	0	0	—	1 (12.5%)	0
その他多剤 (85例)		11 (12.9%)	14 (16.5%)	60 (70.6%)	42 (49.4%)	42 (49.4%)	28 (32.9%)	21 (24.7%)	6 (7.1%)	23 (27.1%)

これらの症例では薬物乱用に伴う行動様式が、社会生活に何らかの影響を与えていることが想定される。「睡眠薬症例」「抗不安薬症例」「鎮痛薬症例」では約半数が既婚であり、これは30～40歳台の年齢層に属する症例が比較的多いことを反映していると思われる。

１１）過去の併用薬物（表11）

主たる使用薬物別にみた過去の薬物使用の既往について、複数回答の結果を表11に示した。過去の併用薬物「なし」は単剤使用例を示し、「覚せい剤症例」「大麻症例」では単剤使用の頻度が47.0%、37.5%と低いのに比較して、「有機溶剤症例」「鎮痛薬症例」では82.5%、80.0%と単剤使用の頻度が高い。「覚せい剤症例」では、有機溶剤の既往例が40%以上を占めて最も多く、有機溶剤使用からの移行例が多いことをうかがわせる。また「覚せい剤症例」では睡眠薬、大麻をはじめとしてその他の薬剤の既往も少なくない。「睡眠薬症例」「抗不安薬症例」は、単剤使用例の割合、覚せい剤既往の割合が類似しており、この結果は両薬物使用群は薬物使用のパターンに何らかの共通性があることを示唆するかもしれない。なお、前回調査で大麻使用の既往は53例、コカインでは32例であった。今回の調査ではコカインは32例で同数であったが、大麻は97例と倍増しており、大麻乱用が確実に拡がっていることがわかる。「大麻症例」では全体の症例数は少ないが、過去に半数が覚せい剤を、1/4が有機溶剤を使用しており、両薬物からの移行率の高さがうかがわれる。

１２）過去１年間における薬物使用の状況（表12）

主たる使用薬物別にみた過去１年間の薬物使用・併用の有無について表12に示す。「覚せい剤症例」では、過去１年間に覚せい剤を使用した例が51.7%と約半数で最も多く、次いで睡眠薬、抗不安薬、有機溶剤の順であった。「有機溶剤症例」では、やはり主たる使用薬物である有機溶剤の使用が65.5%と2/3近くを占め、「覚せい剤症例」に比較してより単剤乱用の傾向が強い。「睡眠薬症例」「抗不安薬症例」「鎮痛薬症例」「鎮咳薬症例」では主たる使用薬物の過去１年以内の使用例はそれぞれ20%台で、その他の薬物使用の頻度は低かった。しかし「その他多剤症例」の結果からは、睡眠薬、抗不安薬、鎮痛薬を中心とする同時併用例が多いことが示されている。

１３）過去の使用薬物名（表13）

過去の使用薬物として記載のあったものについて一般名を示す。

（1）有機溶剤

シンナーが208例と圧倒的に多く、トルエン、ラッカーがこれに次ぐ。ブタンガス・ライターガスの使用が増加しているのが注目される。これらガス類については、吸引中に誤って爆発事故を起こした例も報道されている。

（2）睡眠薬

トリアゾラム、ニトラゼパム、フルニトラゼパム等のベンゾジアゼピン系の睡眠薬が多いが、ブロムワレリル尿素剤もこれに次いで多い。ブロムワレリル尿素剤については、処方箋なしで市販薬として一般の薬局で入手可能であることの影響がある。

（3）抗不安薬

すべてがベンゾジアゼピン系の抗不安薬であった。エチゾラム、ブロマゼパム、ジアゼパム、アルプラゾラムなどが多かった。睡眠薬、抗不安薬ともに、治療用として明確に記載されていたものは除外したが、実際にどの程度が治療のために処方されていたものかは今回の調査結果からは明らかではない。

（4）鎮痛薬

セデスが多く、その他ナロン、バッファリン、サリドン、ノーシン等、処方箋なしに入手可能な鎮痛薬の使用が目立った。その他、非麻薬性鎮痛薬であるペンタゾシンやレペタン、非ステロイド系抗炎症剤であるボルタレン、ポンタール等がみられた。麻薬性鎮痛薬として２例のモルヒネ使用の記載が得られたが、その使用状況については詳細は不明である。

（5）鎮咳薬

液状鎮咳薬であるブロン液が依然として最も多く使用されていた。トニンは塩酸エフェドリンを含有しているため、依存・乱用されやすいと思われる。

（6）その他

LSD使用例の報告は前回調査ではわずかに１例のみであったが、今回の調査では21例と著しく増加していた。また、ヘロイン、MDMA（methylenedioxymethamphetamine；幻覚剤であり一般には“ecstasy”として知られ

表12　過去１年間における薬物使用・併用の有無（複数回答）

	覚せい剤	有機溶剤	睡眠薬	抗不安薬	鎮痛薬	鎮咳薬	大　麻	ｺｶｲﾝ	その他
主たる使用薬物									
覚せい剤（509例）	263 (51.7%)	20 (3.9%)	43 (8.4%)	25 (4.9%)	9 (1.8%)	2 (0.4%)	20 (3.9%)	2 (0.4%)	5 (1.0%)
有機溶剤（206例）	8 (3.9%)	135 (65.5%)	0	1 (0.5%)	0	1 (0.5%)	2 (1.0%)	0	1 (0.5%)
睡眠薬（38例）	1 (2.6%)	3 (7.9%)	11 (28.9%)	1 (2.6%)	0	1 (2.6%)	0	0	0
抗不安薬（13例）	1 (7.7%)	0	1 (7.7%)	3 (23.1%)	0	0	0	0	0
鎮痛薬（20例）	0	0	1 (5.0%)	1 (5.0%)	4 (20.0%)	0	0	0	0
鎮咳薬（21例）	0	0	0	0	2 (9.5%)	6 (28.6%)	1 (4.8%)	0	0
大　麻（8例）	0	0	1 (12.5%)	1 (12.5%)	0	0	1 (12.5%)	0	0
その他多剤（85例）	4 (4.7%)	2 (2.4%)	46 (54.1%)	34 (40.0%)	27 (31.8%)	16 (18.8%)	3 (3.5%)	1 (1.2%)	12 (14.1%)
その他単剤（4例）	0	0	0	0	0	0	0	0	3 (75.0%)
計（904例）	277 (30.6%)	160 (17.7%)	103 (11.4%)	66 (7.3%)	42 (4.6%)	26 (2.9%)	27 (3.0%)	3 (0.3%)	21 (2.3%)

表13　過去の使用薬物名

使用薬剤名													
有機溶剤	例数	睡眠薬	例数	抗不安薬	例数	鎮痛薬	例数	鎮咳薬	例数	その他	例数
ｼﾝﾅｰ	208	ﾄﾘｱｿﾞﾗﾑ	49	ｴﾁｿﾞﾗﾑ	12	ｾﾃﾞｽ	24	ﾌﾞﾛﾝ	47	LSD	21
ﾄﾙｴﾝ	56	ﾆﾄﾗｾﾞﾊﾟﾑ	29	ﾌﾞﾛﾏｾﾞﾊﾟﾑ	9	ﾅﾛﾝ	16	ﾄﾆﾝ	9	ﾍﾞｹﾞﾀﾐﾝ	15
ﾗｯｶｰ	16	ﾌﾙﾆﾄﾗｾﾞﾊﾟﾑ	28	ｼﾞｱｾﾞﾊﾟﾑ	9	ﾊﾞｯﾌｧﾘﾝ	9	ｴﾌｪﾄﾞﾘﾝ	7	ﾍﾛｲﾝ	7
ﾌﾞﾀﾝｶﾞｽ･ﾗｲﾀｰｶﾞｽ	15	ﾌﾞﾛﾑﾜﾚﾘﾙ尿素	22	ｱﾙﾌﾟﾗｿﾞﾗﾑ	8	ﾍﾟﾝﾀｿﾞｼﾝ	7	ﾘﾝ酸ｺﾃﾞｲﾝ	2	抗精神病薬	6
ﾎﾞﾝﾄﾞ	7	ﾌﾞﾛﾁｿﾞﾗﾑ	13	ﾛﾗｾﾞﾊﾟﾑ	4	ｻﾘﾄﾞﾝ	5	ﾌｽｺﾃﾞｼﾛｯﾌﾟ	1	抗うつ剤	3
ｾﾒﾀﾞｲﾝ	2	ｿﾞﾋﾟｸﾛﾝ	8	ｸﾛﾙｼﾞｱｾﾞﾎﾟｷｼﾄﾞ	3	ﾎﾞﾙﾀﾚﾝ	5	ﾃｵﾄﾞｰﾙ	1	MDMA（"ｴｸｽﾀｼｰ"）	3
その他	5	ﾊｲﾐﾅｰﾙ	8	ｸﾛﾛｷｻｿﾞﾗﾑ	3	ﾉｰｼﾝ	4	ｱｽｹﾞﾝ	1	筋弛緩剤	3
		ｴｽﾀｿﾞﾗﾑ	7	ﾌﾙﾄﾌﾟﾗｾﾞﾊﾟﾑ	1	ﾎﾟﾝﾀｰﾙ	3	その他市販薬	5	下剤	3
		ﾛﾙﾒﾀｾﾞﾊﾟﾑ	2	ｸﾛﾅｾﾞﾊﾟﾑ	1	ﾚﾍﾞﾀﾝ	2			精神刺激薬	3
		ﾍﾟﾝﾄﾊﾞﾙﾋﾞﾀｰﾙ	2	ｸﾛﾁｱｾﾞﾊﾟﾑ	1	ﾛｷｿﾆﾝ	2			ﾌﾟｼﾛｼﾋﾞﾝ("ﾏｼﾞｯｸﾏｯｼｭﾙｰﾑ")	2
		ﾌﾙﾗｾﾞﾊﾟﾑ	2	ﾛﾌﾗｾﾞﾌﾟ酸ｴﾁﾙ	1	麻薬系鎮痛薬	2			抗ﾋｽﾀﾐﾝ薬	2
		ﾊﾛｷｻｿﾞﾗﾑ	1	ｵｷｻｿﾞﾗﾑ	1	ﾌﾞｽｺﾊﾟﾝ	1			ﾒｽｶﾘﾝ	1
		その他	4	その他	3	ｱｽﾋﾟﾘﾝ	1			市販総合感冒薬	4
						その他市販薬	3			その他	6

表14　主たる使用薬物の初回使用年齢

	主たる使用薬物							
	覚せい剤	有機溶剤	睡眠薬	抗不安薬	鎮痛薬	鎮咳薬	大麻	
	例数 (%)	例数 (%)	例数 (%)	例数 (%)	例数 (%)	例数 (%)	例数 (%)	(計)
10～14歳	10 (2.0)	60 (29.1)	0	0	0	0	0	70
15～19歳	170 (33.4)	117 (56.8)	1 (2.6)	0	1 (5.0)	3 (14.3)	2 (25.0)	294
20～24歳	122 (24.0)	8 (3.9)	6 (15.8)	3 (23.1)	3 (15.0)	6 (28.6)	3 (37.5)	151
25～29歳	64 (12.6)	1 (0.5)	4 (10.5)	2 (15.4)	2 (10.0)	4 (19.0)	1 (12.5)	78
30～34歳	32 (6.3)	2 (1.0)	5 (13.2)	3 (23.1)	2 (10.0)	4 (19.0)	1 (12.5)	49
35～39歳	18 (3.5)	0	10 (26.3)	1 (7.7)	2 (10.0)	0	0	31
40～44歳	6 (1.2)	2 (1.0)	2 (5.3)	1 (7.7)	2 (10.0)	1 (4.8)	0	14
45～49歳	2 (0.4)	0	3 (7.9)	1 (7.7)	0	0	0	6
50～54歳	0	0	0	0	0	0	0	0
55～59歳	0	0	2 (5.3)	0	1 (5.0)	0	0	3
60～64歳	0	0	0	0	0	0	0	0
65歳以上	0	0	0	0	1 (5.0)	0	0	1
不明	85 (16.7)	16 (7.8)	5 (13.2)	2 (15.4)	6 (30.0)	3 (14.3)	1 (12.5)	118
(計)	509例	206例	38例	13例	20例	21例	8例	815例
平均±SD(歳)	22.2±6.2	16.1±3.8	33.6±9.8	31.0±9.0	34.3±14.1	25.1±6.3	22.4±4.4	

表15　「覚せい剤症例」（総症例数：509例）における初回使用薬物と使用年齢

	覚せい剤	有機溶剤	睡眠薬	抗不安薬	鎮痛薬	大麻	コカイン	その他
	例数 (%)	例数 (%)	例数 (%)	例数 (%)	例数 (%)	例数 (%)	例数 (%)	例数 (%)
10歳以下	0	0	0	0	0	0	0	0
11歳	0	1 (0.2%)	0	0	0	0	0	0
12歳	0	5 (1.0%)	0	0	0	0	0	0
13歳	2 (0.4%)	27 (5.3%)	0	0	0	0	0	0
14歳	7 (1.4%)	29 (5.7%)	1 (0.2%)	0	0	0	0	0
15歳	6 (1.2%)	39 (7.7%)	1 (0.2%)	0	1 (0.2%)	2 (0.4%)	0	0
16歳	14 (2.8%)	35 (6.9%)	3 (0.6%)	1 (0.2%)	3 (0.6%)	0	1 (0.2%)	1 (0.2%)
17歳	17 (3.3%)	12 (2.4%)	1 (0.2%)	0	0	1 (0.2%)	0	0
18歳	18 (3.5%)	7 (1.4%)	1 (0.2%)	0	0	4 (0.8%)	0	0
19歳	19 (3.7%)	3 (0.6%)	0	0	0	3 (0.6%)	0	0
20～24歳	55 (10.8%)	3 (0.6%)	0	0	0	2 (0.4%)	0	0
25～29歳	40 (7.9%)	0	0	0	1 (0.2%)	1 (0.2%)	1 (0.2%)	0
30～34歳	18 (3.5%)	0	1 (0.2%)	0	0	0	0	0
35～39歳	12 (2.4%)	1 (0.2%)	0	0	0	0	0	0
40～44歳	5 (1.0%)	0	1 (0.2%)	0	0	0	0	0
45～49歳	1 (0.2%)	0	0	0	0	0	0	0
50歳以上	0	0	0	0	0	0	0	0
計	214 (42.0%)	162 (31.8%)	9 (1.8%)	1 (0.2%)	5 (1.0%)	13 (2.6%)	2 (0.4%)	1 (0.2%)
平均±SD(歳)	23.2±7.0	15.2±2.4	23.2±12.4	16.0±0.0	18.0±5.0	18.7±3.4	22.5±9.2	16.0±0.0

る）、メスカリン等の報告もあり、使用薬剤の多様化は確実に進みつつある。このほか、抗精神病薬、抗うつ薬等の医療用薬剤もあげられており、これらの薬物の使用状況の詳細は不明だが、その入手経路はほとんどが医療機関からであると思われ、処方の際には十分な注意が必要であると考えられる。

１４）主たる薬物の初回使用年齢（表14）

全体的には20歳代を中心とした初回使用がみられる。「覚せい剤症例」では平均22.2歳で初回使用がみられるのに対して、「有機溶剤症例」ではこれより早く平均16.1歳で初回使用がみられている。このように、有機溶剤使用においてみられた低年齢における初回使用は、他のすべての薬剤と異なる際だった特徴といえる。「睡眠薬症例」「抗不安薬症例」「鎮痛薬症例」における主たる薬物の初回使用年齢は、30歳台前半と高かった。これらの薬物の初回使用が、治療用として処方されたものをどうかについてははっきりしない。また、「大麻症例」「鎮咳薬症例」では「覚せい剤症例」と同様平均20歳台前半で初回使用がみられており、「有機溶剤症例」に次いで低年齢で乱用が開始されていた。

１５）「覚せい剤症例」における初回使用薬物と使用年齢（表15）

最も症例数の多かった「覚せい剤症例」における初回使用薬物とその使用年齢について示す。509例のうち42%が覚せい剤、31.8%が有機溶剤を最初に使用していた。覚せい剤の初回使用は20歳代が最も多く平均22.2歳であったが、有機溶剤の初回使用では多くがこれに先行して、平均15.2歳で乱用を開始していた。また、この15.2歳という平均年齢は、「有機溶剤症例」における有機溶剤の初回使用の平均年齢16.1歳に比較してわずかだが低年齢であった。従来指摘されているように、多剤使用においてはやはり有機溶剤が“gateway drug”として機能していることがうかがわれる。睡眠薬、抗不安薬、鎮痛薬についても10歳代後半から20歳代前半にかけてこれらの薬物を初回使用している割合が高い。また、症例数はそれほど多くないが、大麻、コカインを最初に使用する例もみられており、昨今の入手しやすさがその要因の一つとして考えられる。

１６）主たる使用薬物の使用期間（表16）

主たる使用薬物別にみた薬物使用期間（年）について表16に示す。薬物使用期間の算出については、最近１年以内に使用のみられる症例については「年齢－初回使用年齢」、１年以内の使用のみられない症例は「最終使用年齢－初回使用年齢」で求めた。「覚せい剤症例」「有機溶剤症例」を中心に使用期間の長い症例が多くみられた。「覚せい剤症例」「有機溶剤症例」「睡眠薬症例」では、約10～15%が20年以上の長期にわたる使用歴を示した。これらの症例では、症状の遷延化との関連が示唆される。「抗不安薬症例」を除いて、各薬物の使用期間はほぼ1年未満から5年以上の長期にわっていた。一方、使用期間１年未満の症例の割合は7～15%にみられており、これらの短期使用の症例の存在は、これらの薬物使用により短期間で事例化していること、また新たな乱用者の出現を示す結果と考えられる。

１７）主たる使用薬物の中断期間（表17）

「睡眠薬症例」「抗不安薬症例」「鎮痛薬症例」「鎮咳薬症例」では80%以上が、中断後１年以内であった。特に「鎮咳薬症例」では94.4%が中断１年未満であり、平均0.1年と最も短かった。「有機溶剤症例」では73.0%が１年以内であるが、中断後10年近く経過している症例まで幅広くみられる。「覚せい剤症例」「大麻症例」では、約60%が１年以内であるが、前者では「有機溶剤症例」よりもさらに中断期間が延長し、この結果は覚せい剤使用に伴う精神・身体症状の遷延化や再燃状態を示すものと考えられる。

１８）普段の飲酒状況（表18）

常用的飲酒の割合は「大麻症例」を除きほぼ15～25%で、中でも「鎮痛薬症例」「覚せい剤症例」「睡眠薬症例」で比較的高かった。　準常用的飲酒は「覚せい剤症例」「有機溶剤症例」「鎮痛薬症例」「その他多剤症例」で10%前後の割合を示した。飲酒しない割合は「鎮咳薬症例」「抗不安薬症例」「大麻症例」「睡眠薬症例」「鎮痛薬症例」で40%前後と高く「覚せい剤症例」「有機溶剤症例」「その他多剤症例」では約1/4以下と低かった。特に「覚せい剤症例」では準ないし常用的飲酒者割合が高く、非飲酒者の割合が低かったという特徴がある。

表16　主たる使用薬物の使用期間（記載のあった症例のみ）

	主たる使用薬物						
	覚せい剤	有機溶剤	睡眠薬	抗不安薬	鎮痛薬	鎮咳薬	大麻
	例数 (%)	例数 (%)	例数 (%)	例数 (%)	例数 (%)	例数 (%)	例数 (%)
1年未満	27 (7.3%)	13 (7.3%)	3 (10.3%)	0	2 (15.4%)	0	1 (14.3%)
1～2年未満	34 (9.2%)	14 (7.9%)	4 (13.8%)	0	4 (30.8%)	1 (5.9%)	1 (14.3%)
2～3年未満	37 (10.0%)	4 (2.3%)	3 (10.3%)	0	1 (7.7%)	0	1 (14.3%)
3～4年未満	17 (4.6%)	5 (2.8%)	3 (10.3%)	0	0	3 (17.6%)	0
4～5年未満	22 (5.9%)	8 (4.5%)	2 (6.9%)	0	0	1 (5.9%)	1 (14.3%)
5～10年未満	83 (22.4%)	51 (28.8%)	5 (17.2%)	7 (87.5%)	1 (7.7%)	8 (47.1%)	1 (14.3%)
10～15年未満	69 (18.6%)	32 (18.1%)	3 (10.3%)	1 (12.5%)	4 (30.8%)	0	2 (28.6%)
15～20年未満	41 (11.1%)	24 (13.6%)	2 (6.9%)	0	0	4 (23.5%)	0
20～25年未満	25 (6.8%)	21 (11.9%)	2 (6.9%)	0	1 (7.7%)	0	0
25～30年未満	10 (2.7%)	3 (1.7%)	0	0	0	0	0
30～35年未満	2 (0.5%)	1 (0.6%)	0	0	0	0	0
35年以上	3 (0.8%)	1 (0.6%)	2 (6.9%)	0	0	0	0
計	370例	177例	29例	8例	13例	17例	7例
平均±SD(年)	9.0±7.8	10.2±7.4	8.3±9.7	7.9±2.0	6.2±6.9	7.4±5.0	5.1±4.4

表17　主たる使用薬物の中断期間

	主たる使用薬物						
	覚せい剤	有機溶剤	睡眠薬	抗不安薬	鎮痛薬	鎮咳薬	大麻
	例数 (%)	例数 (%)	例数 (%)	例数 (%)	例数 (%)	例数 (%)	例数 (%)
1年以内	247 (59.5%)	135 (73.0%)	30 (85.7%)	9 (81.8%)	15 (83.3%)	17 (94.4%)	4 (57.1%)
1～2年	15 (3.6%)	9 (4.9%)	2 (5.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (28.6%)
2～3年	21 (5.1%)	9 (4.9%)	1 (2.9%)	2 (18.2%)	1 (5.6%)	1 (5.6%)	1 (14.3%)
3～4年	15 (3.6%)	10 (5.4%)	0	0	0	0	0
4～5年	11 (2.7%)	5 (2.7%)	1 (2.9%)	0	0 (0.0%)	0	0
5～9年	44 (10.6%)	11 (5.9%)	1 (2.9%)	0	1 (5.6%)	0	0
10～14年	31 (7.5%)	6 (3.2%)	0	0	0	0	0
15～19年	17 (4.1%)	0	0	0	1 (5.6%)	0	0
20～24年	9 (2.2%)	0	0	0	0	0	0
24～29年	1 (0.2%)	0	0	0	0	0	0
30～34年	1 (0.2%)	0	0	0	0	0	0
35～39年	0	0	0	0	0	0	0
40～44年	2 (0.5%)	0	0	0	0	0	0
45年以上	1 (0.2%)	0	0	0	0	0	0
計	415例	185例	35例	11例	18例	18例	7例
平均±SD(年)	3.5±6.5	1.2±2.6	0.4±1.1	0.4±0.8	1.4±4.3	0.1±0.5	0.6±0.8

１９）調査時の飲酒状況（表19）

「大麻症例」を除く症例全体の約半数が普段と同様の飲酒状況であった。普段より著しく多いか乱用的飲酒がみられたものの割合は、「抗不安薬症例」「鎮痛薬症例」「その他多剤症例」「覚醒剤症例」で高く、その割合は10～15%前後であった。こうした飲酒行動の変化と症状再燃、遷延化との関連が想定される。

２０）乱用的飲酒の既往（表20）

乱用的飲酒（生活・健康に影響を及ぼす程の過量飲酒）の既往の割合は、「鎮痛薬症例」「覚せい剤症例」「その他多剤症例」「睡眠薬症例」「有機溶剤症例」で高かった。これらの症例では、乱用的飲酒行動が精神症状の再燃・遷延と何らかの関連をもっていることが想定される。一方、「大麻症例」「その他単剤症例」では１例もみられなかった。全体としては、25.8%に乱用的飲酒の既往がみられていた。

表18　主たる使用薬剤別にみた普段の飲酒状況

		飲酒せず		禁酒中		機会的飲酒（月2・3回以内）		準常用的飲酒（週3回以内）		常用的飲酒（週4回以上）		不　明	
		例数	%	例数	%	例数	%	例数	%	例数	%	例数	%
覚せい剤	(509例)	86	(16.9)	41	(8.1)	137	(26.9)	56	(11.0)	100	(19.6)	89	(17.5)
有機溶剤	(206例)	52	(25.2)	18	(8.7)	57	(27.7)	23	(11.2)	31	(15.0)	25	(12.1)
睡眠薬	(38例)	14	(36.8)	6	(15.8)	7	(18.4)	1	(2.6)	7	(18.4)	3	(7.9)
抗不安薬	(13例)	5	(38.5)	1	(7.7)	4	(30.8)	0	(0.0)	2	(15.4)	1	(7.7)
鎮痛薬	(20例)	7	(35.0)	4	(20.0)	2	(10.0)	2	(10.0)	4	(20.0)	1	(5.0)
鎮咳薬	(21例)	9	(42.9)	0	(0.0)	5	(23.8)	1	(4.8)	3	(14.3)	3	(14.3)
大　麻	(8例)	3	(37.5)	0	(0.0)	5	(62.5)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)
その他多剤	(85例)	23	(27.1)	15	(17.6)	18	(21.2)	10	(11.8)	12	(14.1)	7	(8.2)
その他単剤	(4例)	0	(0.0)	1	(25.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	1	(25.0)	2	(50.0)
計	(904例)	199	(22.0)	86	(9.5)	235	(26.0)	93	(10.3)	160	(17.7)	131	(14.5)

表19　調査時の飲酒状況

		普段と同様の飲酒状況		普段より著しく多いか乱用的飲酒がみられたもの		不　明	
	総症例数	例数	%	例数	%	例数	%
覚せい剤	509	277	(54.4)	53	(10.4)	179	(35.2)
有機溶剤	206	122	(59.2)	16	(7.8)	68	(33.0)
睡眠薬	38	22	(57.9)	3	(7.9)	13	(34.2)
抗不安薬	13	7	(53.8)	2	(15.4)	4	(30.8)
鎮痛薬	20	12	(60.0)	3	(15.0)	5	(25.0)
鎮咳薬	21	12	(57.1)	1	(4.8)	8	(38.1)
大　麻	8	8	(100.0)	0	(0.0)	0	(0.0)
その他多剤	85	46	(54.1)	10	(11.8)	29	(34.1)
その他単剤	4	2	(50.0)	0	(0.0)	2	(50.0)
計	904	508	(56.2)	88	(9.7)	308	(34.1)

２１）喫煙状況（表21）

１日21本以上の喫煙者の割合は、「有機溶剤症例」「大麻症例」「睡眠薬症例」「覚醒剤症例」「抗不安薬症例」で30～40%と高かった。前回調査時には大麻症依存例に喫煙者の割合が低く、その理由として使用法が吸煙であることが指摘されたが、今回調査では「大麻症例」の非喫煙者は12.5%のみであった。「抗不安薬症例」「鎮痛薬症例」で非喫煙者の割合が比較的高いことは、前回調査と同様の傾向であった。

２２）家族歴（表22）

全体の症例のうち、52.4%には薬物乱用を含む精神疾患の家族歴をみとめなかった。何らかの家族歴をもっていた症例の割合は、「大麻症例」「その他単剤症例」で各々50.0%、37.5%と高く、「その他多剤症例」「有機溶剤症例」「覚せい剤症例」がこれに次いで高く、15～20%であった。「睡眠薬症例」「抗不安薬症例」「鎮痛薬症例」「鎮咳薬症例」では家族歴の不明な症例の割合が80%前後と高かったため、今回の調査結果からは何ともいえない。

表20　乱用的飲酒の既往

主たる使用薬剤	総数	あり 例数	あり %	なし 例数	なし %	不明 例数	不明 %
覚せい剤	509	138	(27.1)	222	(43.6)	149	(29.3)
有機溶剤	206	48	(23.3)	126	(61.2)	32	(15.5)
睡眠薬	38	10	(26.3)	20	(52.6)	8	(21.1)
抗不安薬	13	2	(15.4)	10	(76.9)	1	(7.7)
鎮痛薬	20	8	(40.0)	9	(45.0)	3	(15.0)
鎮咳薬	21	4	(19.0)	13	(61.9)	4	(19.0)
大麻	8	0	(0.0)	8	(100.0)	0	(0.0)
その他多剤	85	23	(27.1)	48	(56.5)	14	(16.5)
その他単剤	4	0	(0.0)	3	(75.0)	1	(25.0)
計	904	233	(25.8)	459	(50.8)	212	(23.5)

表21　主たる使用薬剤別にみた喫煙状況

	総数	喫煙せず 例数	喫煙せず %	禁煙中 例数	禁煙中 %	1日20本以内 例数	1日20本以内 %	1日21本以上 例数	1日21本以上 %	不明 例数	不明 %
覚せい剤	509	20	(3.9)	17	(3.3)	223	(43.8)	162	(31.8)	87	(17.1)
有機溶剤	206	9	(5.3)	2	(1.2)	106	(62.4)	66	(38.8)	23	(13.5)
睡眠薬	38	1	(2.6)	1	(2.6)	16	(42.1)	13	(34.2)	7	(18.4)
抗不安薬	13	4	(30.8)	2	(15.4)	2	(15.4)	4	(30.8)	1	(7.7)
鎮痛薬	20	4	(20.0)	0	(0.0)	10	(50.0)	3	(15.0)	3	(15.0)
鎮咳薬	21	3	(14.3)	0	(0.0)	13	(61.9)	3	(14.3)	2	(9.5)
大麻	8	1	(12.5)	0	(0.0)	4	(50.0)	3	(37.5)	0	(0.0)
その他多剤	85	16	(18.8)	3	(3.5)	28	(32.9)	23	(27.1)	15	(17.6)
その他単剤	4	1	(25.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	1	(25.0)	2	(50.0)
計	904	59	(6.5)	25	(2.8)	402	(44.5)	278	(30.8)	140	(15.5)

表22　主要使用薬剤別の家族歴

	総症例数	家族歴あり 例数	家族歴あり %	薬物疾患 例数	薬物疾患 %	精神疾患 例数	精神疾患 %	その他 例数	その他 %	家族歴なし 例数	家族歴なし %	不明 例数	不明 %
覚せい剤	509	77	(15.1)	36	(7.1)	14	(2.8)	27	(5.3)	278	(54.6)	154	(30.3)
有機溶剤	206	38	(18.4)	19	(9.2)	8	(3.9)	14	(6.8)	129	(62.6)	39	(18.9)
睡眠薬	38	3	(7.9)	2	(5.3)	1	(2.6)	0	(0.0)	6	(15.8)	29	(76.3)
抗不安薬	13	1	(7.7)	1	(7.7)	0	(0.0)	0	(0.0)	1	(7.7)	11	(84.6)
鎮痛薬	20	1	(5.0)	1	(5.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	2	(10.0)	17	(85.0)
鎮咳薬	21	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	4	(19.0)	17	(81.0)
大麻	8	3	(37.5)	1	(12.5)	1	(12.5)	1	(12.5)	5	(62.5)	0	(0.0)
その他多剤	85	17	(20.0)	8	(9.4)	2	(2.4)	7	(8.2)	49	(57.6)	19	(22.4)
その他単剤	4	2	(50.0)	0	(0.0)	2	(50.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	2	(50.0)
計	904	142	(15.7)	68	(7.5)	28	(3.1)	49	(5.4)	474	(52.4)	288	(31.9)

２３）「覚せい剤症例」の分類（表23）

今回の調査では、「覚せい剤症例」の状態像について、覚せい剤中毒者対策に関する専門家会議で提唱された診断分類[11]を基にその類型化を行い、覚せい剤急性中毒、覚せい剤依存症、覚せい剤精神病、残遺症候群の４型に分類した。複数回答の結果では表23に示したように、覚せい剤急性中毒が509例中139例（27.3%）、覚せい剤依存症173例（34.0%）、覚せい剤精神病294例（57.8%）および残遺症候群283例（55.6%）であり、覚せい剤精神病および残遺症候群の割合が高かった。各４類型における状態像の有無について以下に示す。

（１）「覚せい剤急性中毒」の状態像（表24）

何らかの“一般的精神・身体症状”を示した割合は95.0%と、ほとんどすべての症例においてみられた。恐慌不安反応・幻覚等の“急性症候群”は58.3%、“反跳症候群”は43.9%にみられた。全体としては急性中毒による受診は、全体の27.3%と最も低かった。

（２）「覚せい剤依存」の状態像（表25）

“覚せい剤の使用行動に変化がみられる症例”の割合は、48.0%と約半数であった。一方“精神神経症状を呈する場合”は93.1%とほとんどの症例でみられていた。このうち、“挿間性の症状発現”は61.3%、“持続性の症状発現”は78.6%と後者の割合が高かった。中でも“意欲減退および情動障害”を呈する症例の割合が依存症症例のうち73.4%を占めた。このように、持続性の精神神経症状を伴う依存症症例の割合がかなり高いことがうかがわれた。

（３）「覚せい剤精神病」の状態像（表26）

覚せい剤精神病に該当する症例は「覚せい剤症例」全体の57.8%と半数を超えた。このうち、“早期消退型”は31.0%、“遷延・持続型”35.7%と後者の割合がやや高かった。前者の“早期消退型”のうち“再燃現象”を示したものは、覚せい剤精神病全体の22.8%、“早期消退型”の73.6%を占め高い割合を示した。“薬物による再燃”と“自然再燃”はそれぞれ14.3%、18.7%と、後者の割合がやや高かったが、大きな差はみられなかった。

（４）「残遺症候群」の状態像（表27）

残遺症候群は「覚せい剤症例」全体の55.6%にみられ、覚せい剤精神病に次いで高い割合を示した。“不安神経症様状態・身体的不定愁訴”を示したものは全体の68.6%と高く、“情動障害・意欲障害を中心とする状態”は58.7%であった。このように、明らかな精神病症状を示さないものの、覚せい剤使用中断後長期にわたり神経症様症状ないし情動・意欲面の障害が残遺する症例の割合が高いことがわかった。なお、これらの項目は、“（２）覚せい剤依存症、（B）精神神経症状を呈する状態、（イ）持続性の症状発現”の回答と一部オーバーラップしている可能性も考えられる。

表23　覚せい剤症例の分類（総症例数509例）　（複数回答）

	あり		なし		不明	
	例数	%	例数	%	例数	%
覚せい剤急性中毒	139	(27.3)	265	(52.1)	105	(20.6)
覚せい剤依存症	173	(34.0)	210	(41.3)	126	(24.8)
覚せい剤精神病	294	(57.8)	142	(27.9)	73	(14.3)
残遺症候群	283	(55.6)	115	(22.6)	111	(21.8)

表24「覚せい剤急性中毒」該当症例の状態像

	あり		なし		不明	
	例数	%	例数	%	例数	%
覚せい剤急性中毒総症例（全509例中）	**139**	**(27.3)**	**265**	**(52.1)**	**105**	**(20.6)**
（A）一般的精神身体症状を呈する状態	132	(95.0)	2	(1.4)	5	(3.6)
（ア）精神症状	123	(88.5)	8	(5.8)	8	(5.8)
（イ）身体症状	110	(79.1)	15	(10.8)	14	(10.1)
（B）急性症候群	81	(58.3)	36	(25.9)	22	(15.8)
（C）反跳症候群	61	(43.9)	43	(30.9)	35	(25.2)

表25　「覚せい剤依存症」該当症例の状態像

	あり		なし		不明	
	例数	(%)	例数	(%)	例数	(%)
覚せい剤依存症総症例（全509例中）	173	(34.0%)	210	(41.3%)	126	(24.8%)
（A）覚せい剤の使用行動に変化がみられる状態	83	(48.0%)	59	(34.1%)	31	(17.9%)
（ア）覚せい剤の使用量の増加	62	(35.8%)	73	(42.2%)	38	(22.0%)
（イ）渇望に基づく使用抑制の障害	70	(40.5%)	64	(37.0%)	39	(22.5%)
（B）精神神経症状を呈する場合	161	(93.1%)	11	(6.4%)	1	(0.6%)
（ア）挿間性の症状発現	106	(61.3%)	55	(31.8%)	12	(6.9%)
（a）詮索熱中、強迫的常同行動等	47	(27.2%)	103	(59.5%)	23	(13.3%)
（b）軽微な離脱症状	86	(49.7%)	69	(39.9%)	18	(10.4%)
（c）渇望に基づく焦燥・易怒性	87	(50.3%)	70	(40.5%)	16	(9.2%)
（イ）持続性の症状発現	136	(78.6%)	35	(20.2%)	2	(1.2%)
（a）意欲減退および情動障害	127	(73.4%)	42	(24.3%)	4	(2.3%)
（b）不安神経症様症候群	76	(43.9%)	79	(45.7%)	18	(10.4%)

表26　「覚せい剤精神病」該当症例の状態像

	あり		なし		不明	
	例数	(%)	例数	(%)	例数	(%)
覚せい剤精神病総症例数（全509例中）	294	(57.8%)	142	(27.9%)	73	(14.3%)
（A）早期消退型（休薬後1ヶ月未満で精神病症状が消退）	91	(31.0%)	153	(52.0%)	50	(17.0%)
（ア）再燃現象の有無	67	(22.8%)	169	(57.5%)	58	(19.7%)
（a）薬物による再燃	42	(14.3%)	178	(60.5%)	74	(25.2%)
（b）自然再燃	55	(18.7%)	178	(60.5%)	61	(20.7%)
（B）遷延・持続型（休薬後1ヶ月以上症状持続）	105	(35.7%)	135	(45.9%)	54	(18.4%)
（C）その他	0	(0.0%)	2	(0.7%)	292	(99.3%)

表27　「残遺症候群」該当症例の状態像

	あり		なし		不明	
	例数	(%)	例数	(%)	例数	(%)
残遺症候群総症例（全509例中）	283	(55.6%)	115	(22.6%)	111	(21.8%)
（A）不安神経症様状態・身体的不定愁訴	194	(68.6%)	66	(23.3%)	23	(8.1%)
（B）情動障害・意欲障害を中心とする状態	166	(58.7%)	59	(20.8%)	58	(20.5%)
（C）その他	0	(0.0%)	0	(0.0%)	283	(100.0%)

D．考察

薬物依存・乱用の問題は、社会・文化的状況を敏感に反映するものであり、多面的かつ継時的調査が重要である。精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査は、医療現場における現状を把握するために意義あるものと考えられる。本実態調査は1976年に佐藤らにより開始されており[4]、こうした一連の調査研究を継続的に実施することで薬物依存・乱用の今日的特徴や推移を把握することが出来る。今年度も1994年度[2]に引き続き、全国の有床精神科医療施設を対象として、1996年9、10月の２ヶ月間にわたり当該施設を受診した薬物関連精神疾患患者に関して、郵送法により調査を実施した。

全国の有床精神科医療施設1,567施設に調査依頼し、578施設（36.9%）より回答を得た。このうち327施設（20.9%）は「該当症例なし」の回答であった。「該当症例あり」の回答は251施設（16.0%）より寄せられ、有効該当症例数は904例であった。前回の1994年度に施行された調査では、依頼総数1572施設、回答772施設（49.1%）、「該当症例なし」514施設（32.7%）、「該当症例あり」258施設（16.4%）、有効該当症例数988例であった。前回調査に比較して回収率が10%以上低下したが、主として「該当症例なし」の回答数が減ったためと思われる。この点については、今後の調査回収の方法について検討を要する。回答施設の内訳としては、国立病院精神科において回答率、「該当症例あり」の回答率が高い傾向にあった。また、「該当症例あり」の回答を得た１施設あたりの平均症例数は、民間病院2.9例、自治体立病院精神科5.1例、大学病院精神科2.4例、国立病院精神科9.8例であり、これは薬物依存の専門的治療を掲げた施設から回答された該当症例数が多いことを反映していた。全体としては、全国から904症例の回答が寄せられ、疫学的に意義のある調査であったと考える。以下、薬物別にみた依存・乱用の動向について考察を加える。

（1）覚せい剤

覚せい剤は、主たる使用薬物としては509例で、全体の56.3%を占め、最も報告が多かった。このうち、覚せい剤単剤の乱用症例は239例（47.0%）で、そのほかの症例には他の薬物の併用ないし既往がみられた。過去の併用薬物としては、有機溶剤が216例（42.4%）と最も多く、ついで睡眠薬67例（13.2%）、大麻64例（12.6%）であった。過去１年間における薬物使用については、覚せい剤使用が263例（51.7%）であり、次いで睡眠薬43例（8.4%）、抗不安薬25例（4.9%）であった。このように最近１年間においても約半数が覚せい剤を使用しており、他の薬物を併用している症例は比較的少なかった。

性別でみると、男性の割合が78.2%と高く、症例の年齢は20歳台後半から30歳台前半に多く、平均年齢は36.1歳であった。未成年者の比率は、1991年は5.2%、1993年は8.4%、そして1994年度は1.9%と減少傾向にあり、今年度の結果でも2.0%と前回同様の低い割合を示したが、むしろ横這いである。一方、高い年齢層に注目してみると、40歳以上は175例（34.4%）でこのうち１年以内に覚せい剤使用例のある例は42例（24.0%）であった。また、50歳以上は66例（13.0%）で１年以内使用例はこのうち11例（16.7%）であった。したがって、40歳以上の症例のうち76.0%、50歳以上では83.3%の症例が、薬物中断１年以上にわたり何らかの精神症状が再発ないし遷延して、治療を継続していることを示している。また、平均の薬物中断期間をみても「覚せい剤症例」では3.5年と、他の薬剤における中断期間と比較して有意に延長している。前回の報告にも、覚せい剤関連精神疾患の中で、特に遷延・再燃例が増加していることが指摘されているが、今回の調査においても、このような薬物使用を中断している、とくに高年齢層に属する症例の割合が高いこと、状態による分類で「残遺症候群」の割合が55.6%と高かった結果から考えると、遷延・再燃例が増加している傾向は前回同様に指摘できよう。

「覚せい剤症例」における多剤使用症例の初回使用薬物については、有機溶剤を平均15.2歳で使用し、以後、抗不安薬、鎮痛薬、大麻等を経て、覚せい剤使用に至る薬物使用歴がうかがえる。有機溶剤の初回使用年齢は、「有機溶剤症例」における有機溶剤の初回使用年齢（16.1歳）と比較するとわずかに低かった。一方、「睡眠薬症例」「抗不安薬症例」「鎮痛薬症例」における各主要薬物の初回使用年齢（各33.6歳、31.0歳、34.3歳）と「覚せい剤症例」におけるこれらの薬物の初回使用年齢を比較すると、「覚せい剤症例」において初回使用年齢

（各23.2歳、16.0歳、18.0歳）は著しく低年齢化していた。また薬物使用期間をみると、1年未満の初期乱用者は1980年代前半の調査（34～37%）以来激減し1994年は3.1%であったが、今回は7.3%と増加傾向がみられた。これに対し、5年以上の長期乱用者は63%を占め、前回の59%を上回った。

福井は、覚せい剤乱用において、「初期乱用者の激減」「乱用の長期化」「乱用者の高年齢化」を指摘している[1]。この2年間の推移をみると、後二者の指摘はそのままあてはまるとしても、初期乱用者は漸増していると言わざるを得ない。未成年者の割合が横這いであることから考えると、初回使用年齢がわずかに高くなっている可能性を考えさせる。乱用の流行期ほどの勢いはないとしても、覚せい剤乱用は決して下火になっているとはいえず、今後その拡がりに十分な注意が必要であろう。

（2）有機溶剤

有機溶剤乱用は、検挙者数でみると1983年にピークに達した後1991年は23,744人、1994年には12,504人と減少し、特に未成年者の減少が顕著であり、未成年者の有機溶剤離れが指摘されている[2]。本調査研究における有機溶剤関連精神疾患の比率においても、1991年に40.7%、1994年には31.9%と減少傾向を示し、今年度の結果も22.8%とさらに減少していることがわかった。乱用者は圧倒的に男性が多く、90%近い割合を示した。未成年者の割合も年々減少傾向にあり、1994年には13.3%と20%を初めて下回ったが、今回も13%足らずでその割合は横這いであった。「有機溶剤症例」は単剤使用例の割合が82.5%と最も高く、過去1年間における併用薬物でも、覚せい剤使用が3.9%みられる以外ほとんど他剤の併用がなく、65.5%が有機溶剤単独使用だった。また、有機溶剤の初回使用年齢は平均16.1歳と他の薬剤に比較して際立って低年齢で使用を開始していた。前述したように、「覚せい剤症例」においては有機溶剤の初回使用年齢は15.2歳これよりわずかに低かった。より低年齢で有機溶剤の乱用を開始した症例の方が、覚せい剤など他剤の乱用に発展しやすい傾向を示しているのかもしれない。これらのことから、「有意溶剤症例」は一応の減少傾向にあるとは考えられるものの、いわゆるgateway drugとしての意義はいまだに軽視できないと思われる。使用期間でみると、1年未満の初期乱用者の割合は1991年には8.3%、1994年には4.7%と減少傾向にあったが、今回は7.3%と増加していた。この結果から直ちに初期乱用者の増加を結論づけることはできないが、少なくとも「有意溶剤症例」の減少傾向を楽観的に捉えることは問題があろう。薬物の使用期間からは、「有意溶剤症例」では平均10.2年と最も使用期間が長かった。また5年以上の長期乱用者は75%を占め、これは1991年の49.1%、1994年の72.4%と、着実に増加傾向にある。このように、有機溶剤乱用においても、乱用の長期化、症状の遷延化の問題が重要である。

（3）睡眠薬、抗不安薬、鎮痛薬

睡眠薬、抗不安薬、鎮痛薬、鎮咳薬の症例の割合はほぼ2～4%であり、症例全体からするとわずかであった。睡眠薬については、それまでは低率で推移してきたものの、1993年、1994年の調査では10%を超えるようになり、その後の経過が注目された。今回の調査では4.2%と低率であったが、「その他多剤症例」の中に60例（70.6%）と睡眠薬使用例が多く含まれており、睡眠薬乱用者が減少しているとは結論できない。睡眠薬、抗不安薬、鎮痛薬使用例はいずれも調査時の平均年齢が高く、およそ39～45歳であった。抗不安薬が唯一女性の割合が53.8%と男性より高かった。また初回使用年齢も30歳台前半と高かった。使用期間は6～8年、中断期間は0.4～1.4年であった。今回の解析結果からみる限り、前回調査で指摘された若年化の傾向は明らかには認められなかった。「睡眠薬症例」「抗不安薬症例」は、単剤使用の割合、覚せい剤併用の割合など似通った傾向があり、何らかの共通性が想定される。

（4）鎮咳薬

鎮咳薬依存・乱用例は、1982年の調査で初めて報告されて以来、毎年報告がみられている。今回の結果では、「鎮咳薬症例」は症例全体からみると21例（2.3%）に過ぎなかったが、「その他多剤症例」の中には、28例が含まれ、85症例のうち約1/3が鎮咳薬を使用していた。鎮咳薬乱用者については、過去に覚せい剤、有機溶剤、大麻、睡眠薬、抗不安薬、鎮痛薬等種々の他の薬物の乱用歴を有することが多く、より強い依存形成と治療困難性をみとめることが指摘されている[2]。今回の調査の結果からは、「鎮咳薬症例」の71.4%が単独使用例であり、過去の併用薬物としては有機溶剤（23.8%）、鎮痛薬

(14.3%)、大麻(9.5%)、覚せい剤(4.8%)であった。過去1年以内の併用薬物としては鎮痛薬(9.5%)、大麻(4.8%)が報告されたが、これらは他の薬物に比較して際立って高い割合であるとはいえなかった。使用薬物としては、従来から指摘されているように液状鎮咳薬であるブロンが圧倒的に多かった。「鎮咳薬症例」では平均25.1歳で鎮咳薬を初めて使用し、使用期間は平均7.4年で、3年以上の使用歴を示す症例が94%と長期におよび、中断期間は0.1年ときわめて短期間であった。このような結果は、清水らが指摘したように[2]鎮咳薬乱用の特徴としての強い依存形成、治療困難性をうかがわせるものであり、同時に乱用の長期化をも考えさせる。また、「覚せい剤症例」において初回使用薬物として報告がなかった薬物は唯一鎮咳薬であった。

(5)大麻

大麻は、海外では最も広く使用される乱用薬物のひとつであり、最近の社会事情を反映してその流行が懸念される薬物の代表である。検挙された大麻事犯者数は1975年以後急増し、1993年には2000人台になっている[2]。福井らが1993年に東京・大阪圏の15歳以上の男女3,000人を対象にした世帯調査の結果[14]では、潜在的な大麻乱用経験者は予想以上に多く、覚せい剤をしのぐ可能性も指摘されている。精神科医療施設における実態調査では、1987年よりわずかではあるが大麻依存例がみられ[7]、漸増傾向にあり、1994年には13例の報告があった[2]。潜在的な乱用者に比較すると医療現場で事例化する率は低いと考えられる。今回は「大麻症例」としては8例のみの報告であったが、「その他多剤症例」の中には21例が含まれ、また過去の大麻乱用歴を有する症例は全体で97例(10.7%)に及んでおり、1994年の988例中53例(5.4%)と比較しても着実に増加していた。大麻の初回使用年齢は、10歳代後半から20歳代前半で平均22.4歳と比較的早かった。こうした乱用の拡がりの背景には、入手しやすくなったこと、"毒性が少なく軽い薬物"といった一般のイメージがあると思われる。今後さらに入手し易さが増せば、大麻が有機溶剤に代わって薬物乱用における初回乱用薬物になっていく可能性も予想される。

(6)その他の薬物

コカインは1989年に初めて2例の報告があり、その後1994年においても3例のみの報告であった。今回の調査においても、調査時点における主たる乱用薬物としてのコカインは登場しなかったが、過去の乱用薬物としては32例の報告があった。これは1994年の報告と同数であったが、マスコミ報道などからもコカイン経験者は増加していることがうかがわれ、今後の動向に注意が必要であろう。LSDは1994年度の調査で初めて報告された[2]。LSD事犯者数は全般的には減少傾向にあるといわれてきたが、今回の結果からは主たる乱用薬物としては回答がなかったものの、過去の乱用薬物としては明らかな記載のあった例だけで21例の報告がみられた。このほか、ヘロイン、MDMA("エクスタシー")、プシロシビン("マジックマッシュルーム")、メスカリン等の報告がみられ、症例数は多くないものの使用薬物の多様化がうかがえる。

E. 結論

1. 全国の精神科医療施設1,567施設を対象に、1996年9月、10月の2ヶ月間に受診した薬物関連精神疾患の実態調査を郵送法にて施行し、578施設(36.9%)から904例の回答を得た。

2. 各都道府県の施設から10.5～69.0%の回答が得られ、全体としては東京、大阪、福岡など大都市圏からの症例報告が多かったが、「覚せい剤症例」「有機溶剤症例」は、他の薬物に比較してほぼ全国からの症例報告があり、両薬物乱用の拡がりをうかがわせた。

3. 904例中、「覚せい剤症例」が509例(56.3%)と最も多く、「有機溶剤症例」206例(22.8%)と併せると715例(79.1%)で両薬物が依然として乱用薬物の主要な位置を占めていた。

4. 次いで「睡眠薬症例」38例(4.2%)、「鎮咳薬症例」21例(2.3%)、「鎮痛薬症例」20例(2.2%)、「抗不安薬症例」13例(1.4%)、「大麻症例」8例(0.9%)、「その他単剤症例」4例(0.4%)であり、主たる薬物の特定が困難であった「その他多剤症例」が85例と多く、多剤乱用の傾向がうかがわれた。

5. 「覚せい剤症例」は増加傾向にあり、その42.4%が過去に有機溶剤を使用しており、51.7%が過去1年間に覚せい剤を使用していた。平均年齢は36.1歳で、未成年者の割合は横這いであったが、薬物使用歴1年未満の初期乱用者が7.3%、5年以上の長期乱用者が63%とそれぞれ

増加し、また40歳以上が34.4%を占めており、初期乱用者の増加とともに、乱用の長期化、乱用者の高齢化がみられた。
6．「覚せい剤症例」の状態像による分類では、急性中毒139例（27.3%）、依存症173例（34.0%）、精神病294例（57.8%）、残遺症候群283例（55.6%）であり、覚せい剤精神病および残遺症候群を呈する症例の割合が高かった。依存症、精神病の状態像の中でも、持続性の症状を呈する症例が多く、症状の遷延・再燃の傾向がうかがわれた。
7．「有機溶剤症例」においては単独使用例が82.5%と最も高く、初回使用年齢が16.1歳と最も低年齢である点が特徴的であった。使用期間は平均10.2年と最も長く、5年以上の長期乱用者は75%を占め、乱用の長期化が目立った。また、報告例数は減少しているものの初期乱用者の割合はむしろ増加傾向にあり、若年層の有機溶剤乱用が下火になったと判断するには慎重を要すると考えられた。
8．「睡眠薬症例」「抗不安薬症例」「鎮痛薬症例」は全体の2～4%で少なかったが、平均年齢が39～45歳と高く、使用期間は6～8年と長い傾向があり、中断期間が0.4～1.4年と短かいという特徴がみられた。また、多剤使用の傾向が認められた。
9．「鎮咳薬症例」は21例（2.3%）と少なかったが、「その他多剤症例」の1/3が鎮咳薬を使用していた。使用薬物は依然として液状鎮咳薬の報告が多かった。使用期間は平均7.4年と長い傾向があり、使用中断期間が0.1年と最も短く、依存形成の強さがうかがわれた。
10．大麻については、「大麻症例」としては8例（0.9%）のみの報告であったが、過去の乱用薬物としては97例の報告があり、明らかに乱用は拡大していると思われた。
11．その他の薬物として、コカイン、LSD、ヘロイン、MDMA等の報告がみられ、乱用薬物の多様化がうかがわれた。
12．いずれの乱用薬物においても長期乱用者が多く、婚姻、学業、職業など家庭および社会生活への影響が大きかった。

謝　辞

日々の臨床でお忙しい中、本実態調査に御協力いただいた全国の精神科医療施設の関係者の皆様に、紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

F．参考文献

1．福井　進：わが国の薬物依存の現状。薬物依存（佐藤光源、福井　進編集）：49－59、1993。世界保健通信社、大阪。
2．清水順三郎：精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査。平成6年度厚生科学研究費補助金「麻薬等総合対策研究事業」薬物依存の社会医学的、精神医学的特徴に関する研究。平成6年度研究成果報告書：87－118、1995。
3．和田　清：中学生における「シンナー遊び」・喫煙・飲酒についての調査研究。平成6年度厚生科学研究費補助金「麻薬等総合対策研究事業」薬物依存の社会医学的、精神医学的特徴に関する研究。平成6年度研究成果報告書：35－60、1994。
4．佐藤倚男、栗栖栄子他：昭和51年度向精神剤乱用実態調査研究報告書。厚生省委託研究、1976。
5．佐藤倚男、福井　進、栗栖栄子他：昭和56年度向精神剤乱用実態調査研究報告書。厚生省委託研究、1981。
6．佐藤倚男、福井　進、栗栖栄子他：昭和57年度向精神剤乱用実態調査研究報告書。厚生省委託研究、1982。
7．福井　進、和田　清、伊豫雅臣他：薬物依存の疫学的調査研究－その1。厚生省精神・神経疾患研究委託費－薬物依存の成因と病態に関する研究。昭和62年度研究報告書。169－182、1988。
8．福井　進、和田　清、伊豫雅臣他：薬物依存の疫学的調査研究－その3。厚生省精神・神経疾患研究委託費－薬物依存の成因と病態に関する研究。平成元年度研究報告書。171－181、1990。
9．福井　進、和田　清、伊豫雅臣他：薬物乱用・依存の実態と動向に関する研究（その2）－医療施設実態調査より－。厚生省精神・神経疾患研究委託費－薬物依存の発生機序と臨床お

－152、1992。
10. 清水順三郎、福井　進：全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査。平成５年度厚生科学研究費補助金「麻薬等総合対策研究事業」薬物依存の社会医学的、精神医学的特徴に関する研究。平成５年度研究成果報告書：79－104、1994。
11. 昭和60年度覚せい剤中毒者総合的対策研究報告書：1-144、1985。
12. 尾崎　茂：精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査。平成７年度厚生科学研究費補助金「麻薬等総合対策研究事業」薬物依存の社会医学的、精神医学的特徴に関する研究。平成７年度研究成果報告書：71－74、1996。
13. 病院要覧1994年度版。医学書院、東京。
14. 福井　進、和田　清、伊豫雅臣：薬物依存の世帯調査。平成５年度厚生科学研究費補助金－薬物依存の社会医学的、精神医学的特徴に関する研究。平成５年度研究報告書、5－26、1994。

該当例なし

薬物依存関連患者調査用紙

記載年月日　1996 年＿＿＿月＿＿＿日　　貴施設名 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

記載医師名 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

1）性別　1. 男　2. 女

2）調査時年齢　満（　　）歳、不明

3）学歴　1. 小学校　2. 中学校　3. 高校　4. 専門学校　5. 短大　6. 大学　7. 不明

4）在学・卒業の別　1. 在学中　2. 中退　3. 卒業　4. 不明

5）職歴（下記のｺｰﾄﾞを記入）　1. 乱用前職業　（　　）、不明　2. 現在の職業　（　　）、不明

（主婦：30、無職：32、暴力団員の場合は無職を含め日常的職種を選択）

01. 農林漁業　02. 商人（卸・小売り）　03. 不動産業　04. 金融業　05. 自営の職人　06. 露天・行商　07. その他の自営業
08. 団体役員　09. 会社員　10. 店員　11. 工員　12. 公務員　13. 風俗営業関係者　14. 風俗営業以外の飲食業関係者　15. 興業関係者
16. 旅館業関係者　17. 交通運輸業関係者　18. 土木建築業関係者　19. 日雇い労働者　20. その他の被雇用者　21. 医療薬業関係者
22. 芸能関係者　23. 船員　24. 軍人・軍属　25. 小学生　26. 中学生　27. 高校生　28. 大学生　29. 各種学校性　30. 主婦
31. 家事手伝い　32. 無職　33. 不定　34. 不明　35. その他

6）暴力団との関係の有無　1. 過去にあったが現在はなし　2. 現在もあり　3. なし　4. 不明

7）現在の配偶関係　1. 未婚　2. 同棲　3. 既婚　4. 離婚　5. 死別　6. 不明

8）これまでの薬物使用歴について

（下の□の中から該当する番号を選び記入してください。また主たる使用薬物の番号を○で囲んで下さい）

	経験の有無*	初回使用年齢**	方　法***	過去1年間の使用の有無*	方　法***	最近1カ月での使用*	方　法***	断薬年齢****
(1) 覚せい剤	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)
(2) 有機溶剤	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)
（薬剤名：ｼﾝﾅｰ、ﾄﾙｴﾝ、ﾗｯｶｰ、その他：　）								
(3) 睡眠薬	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)
（薬剤名：　）								
(4) 抗不安薬	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)
（薬剤名：　）								
(4) 鎮痛剤	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)
（薬剤名：　）								
(5) 鎮咳剤	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)
（薬剤名：　）								
(6) 大麻	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)
(7) コカイン	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)
(8) その他	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)	(　)
（薬剤名：　）								

経験・使用の有無*	1. なし　2. あり　3. 不明
初回使用年齢**	不明の場合：「99」と記入
方 法***	1. 経口　2. 静注　3. 吸引　4. 吸煙（加熱吸引：火であぶって吸引すること） 5. 喫煙（主に大麻）6. 経鼻　7. その他　8. 不明 （複数選択可；可能なら主要な方法の順に記載）
断薬年齢****	「これまで」に経験があり、「過去1年間」以内に経験のない薬物に関しての項目であり、"最終使用時年齢"を記載。

9）設問8）で「覚せい剤」の「5. 吸煙（加熱吸引）」による使用歴のある症例について

1. 初回吸煙年齢（　　）歳　2. 最終吸煙年齢（　　）歳

10）タバコの喫煙状況　1. 喫煙せず　2. 禁煙中　3. 1日20本以内　4. 1日21本以上　5. 不明

11）普段の飲酒状況　1. 飲酒せず　2. 禁酒中　3. 機会的飲酒（月2・3回以内）
4. 準常用的飲酒（週3回以内）5. 常用的飲酒（週4回以上）6. 不明

12）「常用的飲酒」者について、1日の平均的なおよその飲酒量（複数選択可）

1. 日本酒（　　）合　2. ビール（　　）ml　3. 焼酎（　　）合
4. ウイスキー（　　）ml　5. その他（種類：　　、量：　　）

１３）これまでの乱用的飲酒（生活・健康に影響を及ぼす過量飲酒）の有無
1. あり　2. なし　3. 不明

１４）最近１カ月の飲酒状況（現在入院中の場合には入院直前の１カ月について）
1. 普段の飲酒状況（設問１１での回答）と同様
2. 普段の酒量より著しく多いかまたは乱用的飲酒がみられた　3. 不明

１５）貴施設におけるこれまでの治療形態　1. 外来のみ　2. 入院のみ　3. 入院および外来　4. 相談のみ　5. その他

１６）調査時点で入院治療中の場合にはその入院形態　1. 任意入院　2. 医療保護入院　3. 措置入院　4. その他（　　）

１７）治療開始年齢（他院での治療歴があれば含む）　1.（　　）歳　2. 不明

１８）薬物関連精神疾患または精神疾患の家族歴　1. なし　2. 父親　3. 母親　4. 同胞　5. 祖父（父方）　6. 祖母（父方）
7. 祖父（母方）　8. 祖母（母方）　9. 父親の同胞　10. 母親の同胞
11. 不明
ありの場合はその内容（　　）

１９）主たる乱用薬物が「覚せい剤」の症例について、調査時点における以下の状態の有無

（１）覚せい剤急性中毒　(1. あり 2. なし 3. 不明)
　（A）一般的精神身体症状を呈する状態　(1. あり 2. なし 3. 不明)
　　（ア）精神症状（多幸症・精神運動興奮・気分発揚・知覚過敏・錯覚・不安焦燥等）　(1. あり 2. なし 3. 不明)
　　（イ）身体症状（頻脈、散瞳、高・低血圧、発汗、嘔気、食欲減退、不眠等）　(1. あり 2. なし 3. 不明)
　（B）急性症候群（恐慌不安反応・幻覚・せん妄・錯乱等、多くは意識障害を伴う）　(1. あり 2. なし 3. 不明)
　（C）反跳症候群（無欲・易疲労感・抑うつ気・嗜眠・過食等、薬効の消失とともに出現）　(1. あり 2. なし 3. 不明)

（２）覚せい剤依存症（明確な幻覚妄想状態を伴わないもの）　(1. あり 2. なし 3. 不明)
　（A）覚せい剤の使用行動に変化がみられる状態　(1. あり 2. なし 3. 不明)
　　（ア）覚せい剤の使用量の増加　(1. あり 2. なし 3. 不明)
　　（イ）覚せい剤に対する渇望に基づく使用抑制の障害　(1. あり 2. なし 3. 不明)
　（B）精神神経症状を呈する状態　(1. あり 2. なし 3. 不明)
　　（ア）挿間性の症状発現　(1. あり 2. なし 3. 不明)
　　（a）薬効時の一般的薬理作用に加え、詮索熱中・強迫的常同行動、等　(1. あり 2. なし 3. 不明)
　　（b）軽微な離脱症状（無欲・疲労・脱力・抑うつ気分・睡眠障害等）　(1. あり 2. なし 3. 不明)
　　（c）渇望に基づく焦燥・易怒性　(1. あり 2. なし 3. 不明)
　　（イ）持続性の症状発現　(1. あり 2. なし 3. 不明)
　　（a）意欲減退（無為・無欲状態）および情動障害（情動不安定・易怒性等）　(1. あり 2. なし 3. 不明)
　　（b）不安神経症様症候群（心気症・恐怖症等含む）　(1. あり 2. なし 3. 不明)

（３）覚せい剤精神病　(1. あり 2. なし 3. 不明)
　（A）早期消退型（休薬後1カ月未満で精神病症状が消退）　(1. あり 2. なし 3. 不明)
　　（ア）再燃現象の有無　(1. あり 2. なし 3. 不明)
　　（a）薬物による再燃（薬物：有機溶剤、アルコール、その他；　　）　(1. あり 2. なし 3. 不明)
　　（b）自然再燃（不眠、心理社会的ストレス等）　(1. あり 2. なし 3. 不明)
　（B）遷延・持続型（休薬後１カ月以上にわたり症状が持続するもの）　(1. あり 2. なし 3. 不明)
　（C）その他（状態像：　　）

（４）残遺症候群　(1. あり 2. なし 3. 不明)
　（A）不安神経症様状態あるいは身体的不定愁訴のみられる状態　(1. あり 2. なし 3. 不明)
　（B）情動障害、意欲減退を中心とする状態　(1. あり 2. なし 3. 不明)
　（C）その他（状態像：　　）

２０）主たる使用薬物が「覚せい剤」でかつ調査時点で使用中断後1年以上を経過している症例について、その中断期間
1. １～３年未満　2. ３～５年未満　3. ５～１０年未満　4. １０年以上　5. 不明

２１）その他、御報告いただいた症例について特徴的な点がありましたら御教示下さい。

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。